

須磨ノート 中国近代絵画編 (二)

須磨 弥吉郎 記述
西上 実 編

須磨ノート 57 「国画超然派」

国画超然派

昭和廿年八月卅一日

超然派 (五七)

例言

後記に陳べたやうに本稿に盛つた超然派こそ、^{スイ}西国画壇でいへば理想派であるともいへる。そして理想派のスロアガ、ソラナに西国の現代画の生命がかかつてゐるやうに、国画の将来も、この超然派を生かすか如何かに係つてゐる処が大であるを思へば興味尽きないものがある。

超然派

昭和廿一年一月二日記

目次

第一、まえことば

第二、張大千

(イ) 作風

(ロ) 草堂收藏大千作品展望

I、書及び人物

- (1) 書屏 (飛来書 IV 四七八)
- (2) 対聯 石潭白魚自出沒、草屋老樹相因依 (IV 四八四)
- (3) 高士洗足の図 (IV 一七二)
- (4) 大千・善孖合作老虎と人物 (IV 四八〇)
- (5) 蘇翁の図 (IV 四八二)
- (6) 斬妖誅邪 (IV 四八三)

II、山水

- (7) 漁士煙雨 (IV 二二)
- (8) 明人法山水 (IV 九五)
- (9) 仿古山水 (IV 九六)
- (10) 山水 (IV 三四九)
- (11) 黄山奇境 (IV 四五四)
- (12) 華山雲台峰図 (IV 四五七)
- (13) 奇峰雲溪 (IV 四五八)
- (14) 青緑山水 (IV 四六五)
- (15) 上慈母寿山水 (IV 四八二)
- (16) 帰雁絶壁の図 (IV 四九七)
- (17) 黄山三十六峯 (IV 五一二)

(18) 山水 (Ⅳ五二三)

(19) 鸞鷲門墨意山水 (Ⅳ五四一)

(20) 黃山墨意 (Ⅳ五五三)

(21) 山水 (早年作 Ⅳ五五四)

(22) 青綠山水 (Ⅳ五五五)

(23) 落墨蔡銑 (震淵) 合作山水 (Ⅳ五五六)

Ⅲ、花卉及び動物

(24) 牡丹の図 (Ⅳ四七六)

(25) 水牛の図 (Ⅳ四七七)

(26) 蘇東坡梅花仙官 (Ⅳ四七九)

(27) 荷花大幅 (雨過荷池の図 Ⅳ五三五)

第三、王禕

(イ) 横顔

(ロ) 作品

(ハ) 王禕作品収蔵展望

I、人物

(1) 渾欲忘世 (Ⅳ一七七)

Ⅱ、山水

(2) 花樹山水 (Ⅲ七四)

(3) 辺塞微濛 (Ⅳ一七六)

(4) 烟樹詩意 (Ⅳ一七八)

(5) 紅葉帰林 (淡彩 Ⅳ一七九)

(6) 巖壑秋深 (Ⅳ一八一)

(7) 普陀大乘庵 (Ⅳ一八三)

(8) 河岸墨意 (Ⅳ一八五)

(9) 秋尽黄河 (Ⅳ二八五)

Ⅲ、花鳥

(10) 越鳥南枝 (Ⅳ一八〇)

(11) 抗拒 (淡彩 Ⅳ一八二)

(12) 洪鳥初春 (Ⅳ一八四)

(13) 群菜の図 (Ⅳ二三三)

(14) 巖鷲 (Ⅳ二六二)

第四、蕭俊賢

(イ) 横顔

(ロ) 草堂収蔵作品展望

I、書

(1) 対聯 (Ⅳ五一五)

Ⅱ、山水

(2) 山水の図 (Ⅳ六八)

(3) 山水 (Ⅳ二八〇)

(4) 空江一舟 (Ⅳ三二六)

(5) 烟山霧水 (Ⅳ三九四)

(6) 山水の図 (Ⅳ四一八)

(7) 梅花書屋 (Ⅳ四七二)

(8) 山水 (Ⅳ五〇七)

Ⅲ、花卉

(9) 墨筆芍藥 (Ⅳ三〇五)

第五、黃賓虹

(イ) 横顔

(ロ) 草堂蔵作品展望

(1) 山水(広東へ4)

(2) 扇面山水及び字(IV二七五)

(3) 山水墨意(IV三〇二)

(4) 合作画「石竹」(IV三六二)

(5) 山水(IV四四二)

第六、汪采白

(イ) 横顔

(ロ) 草堂藏品展望

(1) 淡彩山水(IV一五三)

(2) 采白・余紹宋合作扇面山水(IV二七五)

(3) 仿昌陽子山水(IV三五六)

(4) 秋林雨霽(IV三五七)

(5) 紅葉鳴禽(IV三五八)

(6) 長子汪克劭作「獅子」(IV三八五)

第七、潘天授

○山水(阿寿竹谷図 IV二六七)

第八、曹玄宇

○瓜棚と蛙(IV三三八)

第九、王顯詔

(1) 古柏の図(IV四二)

(2) 字条(IV二六五)

第十、閔羅張

(1) 匡廬の図(へ6)

(2) 五老峰の図(へ7)

第十一、石霞和尚

○山水(へ5)

第十二、結言

目次終り

第一、まえことば

超然派といつても、別段他派とそれ程にかけ離れて居るわけでもないかも知れない。素々同時代の国画であつて見れば、大変な相違がないと云へないわけでもない。唯その作意に於いて、又その気構えに於いて、他の各派のやうに聊かでも聯繫がない点に着眼せば、超然派といふのはこの一団をまとめ得る呼称だといへる。この点は先に「国画分野展望」に於いて陳べた通りである。

梅花草堂収藏品目中、大きを占め、自然、超然派の中でも現代中国画壇に重きをなす大体の順序に依つて、各人個別的に叙述しやうと思ふ。

唯だ全体を通ずる性格的標準をいふならば、実にそれぞれの個性を生かさんことに是れ努めたとでも云へる程、各人各様の味を持つてゐることで、自然、全体的通性は、あつても少ないが、偶発的なものに過ぎないと思はれる。

第二、張大千

大千に就いては曩に「手巻類」中、雷峯塔巻について述べたる際、又「百果巻」につき略叙の機に、将た又「冊葉 現代冊」に於いて屢々その作風に至る迄詳述せるが、要するに「草堂集」第七頁三六に記述せる通り、黄山派をも圧し、特に淡彩の用法は現代随一、書法亦た奇古を極め、一般に現代独歩の觀あり。北方派、溥儒と併び

て「北溟南張」の称あり。張善孖の弟。修髯古貌、山水・人物・花卉共に精美、石濤の作風に酷似し、自然、既に世に清湘老人の作品として通るものの中の相当部分は大千の手に成るものなりとさへ称せらる。

草堂の收藏する軸物は廿七点を下らざるものの如し。

(イ) 作風

色彩手輕にして爽快を極め、器用なるコロリストとしては現代人多しといへども大千の右に出でるものなし。

而して古風に仕上げ、苟も現代人の作風を存せず。そこに大千が多く結果に於いて石濤辺の偽作をなすと貶するものある位なり。

書法が示す如く、詩意に富む大千の作風は、花卉類に於いて特にその特色を發揮す。草堂の藏品は蘇州なる大千の画室に直接出でたるもの多く、又た特にその令兄、善孖の家に佳作の故を以て永く收藏し居たるものを含むが故に、上述の如き特色ある作意を最も顯著に發揮せるもの多きは、大千、南京の山人居を訪れたる砌、驚き居たるに依りても明かなり。

大千は興至れば多作濫造を敢てするの風を存す。為に作品中、粗笨に過ぎて詩意を失へるものなきにあらず。又た時には、如何にも先哲の作を摸したりといはぬ許りに固くなり過ぎたるものもあり。この故に、山人、大千の作品を選ぶに當りては、常に上記の二弊を避くるに力めたり。

大千は会話に巧みにして、実に対者に快感を与ふるに妙を得たり。而して磊落なれば、その作品にも概ねその性質遷移表現せられ居るを感じしめらるること屢々なり。

大千は斗酒尚ほ辞せず、常に美女を蓄ふるを以て習ひとなす。芸術も結局人格の表現なり。山人、旧に、又た夙に、大千作品中にその弊風隠し難きものあるを痛恨するや久しきものあり。唯だ收藏品中にはこの弊の少きものを選ぶに力めたる積りなり。

尤も郷党の大画伯、寺崎広業などにも、又た橋本閔雪等にも同様の弊あり。余りに奇麗好きでは論評出来ざるも、草堂往来なれば卒直に之を茲に誌すものなり。

(ロ) 草堂收藏大千作品展望

收藏軸類廿七点あり。他に手卷及び冊類のあるは、前にも述べたり。軸類を、Ⅰ書及び人物、Ⅱ山水、Ⅲ花卉及び動物に分ちて記述すること次の如し。

Ⅰ、書及び人物

(1) 書屏 (Ⅳ四七八)

昭和十歳十一月七日、豹文斎自身收藏せるものなりとて持来せり。字形奈何にも大千風にて雅味と独創の風あり。飛来の書なり。

(2) 対聯^① (Ⅳ四八四)

同上。

石潭白魚自出沒、

草屋老樹相因依、

書風・句様、総て詩意深し。

(3) 高士洗足の図 (Ⅳ一七二)

昭和九歳十月十九日、金陵夫子廟に獲たり。

(4) 大千・善孖合作老虎と人物^② (Ⅳ四八〇) (挿図1)

挿図1 老虎と人物 張大千・張善孖

易子毛有親郎氏也詩云虎見
圖為彩色大書世世記

蘇翁
甲辰春仲
善孖張大千
寫于蘇州
城中之大宅
大相國寺



昭和十一年七月一日、豹文齋、大千自身收藏の框底並びに善孖の家に特に収めありしものを一併引受け来れりとて蘇州より携行、直ちに草堂に割愛せり。

(5) 蘇翁の図 (IV四八二)

同上。史画の極致といひ得べし。この種の作品には堅きに過ぎる場合多きも、本作は大千風に雅味を存し、佳作たるべし。

(6) 斬妖誅邪 (IV四八三)
同上。創意多し。

II、山水

(7) 漁士煙雨の図⁽³⁾ (IV二二)

北平所獲、年月日を逸す。

(8) 明人法山水 (IV九五)

(9) 仿古山水 (IV九六)

(10) 山水 (IV三四九)

昭和九歲十一月一日、北京榮古齋に獲たり。力作なり。

(11) 黄山奇境 (IV四五四)

昭和十歲二月廿六日、蘇州廬会楼より滬上に需む。

(12) 華山雲台峰図⁽⁴⁾ (IV四五七) (挿図2)

昭和十歲三月廿三日、蘇州廬会楼より海上に於いて需む。佳作なり。

挿図2 華山雲台峰図 張大千



(13) 奇峰雲溪の図 (IV四五八)

同上。

(14) 青緑山水 (IV四六五)

昭和十歲五月十日、松華齋に需む。明朝文徵明辺の青緑山水に見ゆ。

(15) 上慈母寿山水 (IV四八二)

昭和十一年七月一日、豹文齋、張善孖收藏中より携来す。大千と思はれぬ程作意新しき佳作なり。

(16) 帰雁絶壁の図⁽⁵⁾ (IV四九七)

昭和十一年七月卅日、榮宝齋に獲たり。絶佳の作たるべし。作意もさる事ながら墨色・構想共に雅味の極致たり。

(17) 黄山三十六峯 (IV五二二)

昭和十一歳九月十日、廬会楼に獲たり。廬会楼は蘇州に在りて大千と来往繁く、佳作を見れば携来す。全く石濤を彷彿せしむるの作なり。

(18) 山水の図 (IV五二三)

同上。

(19) 鷺鷥門墨意山水 (IV五四一)

昭和十一歳十二月十日、集錦齋に獲たり。大作にして、又大千の絶佳の作品といふべし。

(20) 黄山墨意 (IV五五三)

昭和十二歳一月一日、蘇州古玩舗に獲たり。清湘老人そつくりなり。

(21) 山水 (早年作 IV五五四)

同上。

(22) 青緑山水 (IV五五五)

同上。佳作なり。

(23) 落墨蔡銑 (震淵) 合作山水 (IV五五六)

Ⅲ、花卉及び動物

(24) 牡丹の図 (IV四七六)

昭和十一歳七月一日、豹文齋、大千自身の框底より獲来れり。罕に観る風味あり。

(25) 水牛 (IV四七七)

同上。墨色豊かなり。

(26) 蘇東坡梅花仙官 (IV四七九)

同上。佳作にして而かも大千の癖たる粗筆に失せず。

(27) 荷花大幅 (IV五三五)

昭和十一歳十一月廿二日、豹文齋に獲たり。「雨過荷池の図」、絶佳なり。

「梅花草堂美術写真帖」

大千の豪放味最も有効に表現せられたる大作なり。曾て山人荷花の図にして同様の大幅を収蔵せしを三森連象君に贈れるが、本作も之に彷彿たるものもあるも、大千の方は何となく器用なり。

第三、王祺

(イ) 横顔

王祺こそ、本稿の所謂超然派といふ呼称がピッタリとあたる。画家にあらざして政治家である。字面通り文人画家である。

湖南省の出身で、三民革命の先輩の一人で汪兆銘・呉稚暉等と交遊、現に中央委員である。自然、中央政界に重きをなす人物である。書法も秃筆を用ゐたやうに見せる特有なる風味あり、画法に至つては、概ね石濤、又は黄山派に私淑して遂に一家をなすに至つた。

濫作の気味あれば、作品中構想未熟なるもの少からざるも、その意を得たるものに至つては奔放不羈、線極めて太くして他人の企及し得ざるもの多く、後代必ずや民国中最も特徴ある画家の一となすであらうと思はれる。その作風と構想と、將た又た墨色とは、共に天馬空を翔けるの概あり。山水の中に傑作少しとせざるも、鳥を題材とするものに亦た妙味あり。例へば、後述(10)(IV一八〇)「越鳥南枝」の墨意の如きは恐らく現代全画壇の名作といふべし。又た花卉にも風味大なるものあり。後述(11)(IV一八二)「抗拒」の如

きは名作たり。草堂蔵する所のものは、概ね大展覽会中の逸品を獲たるもの故、作者王祺亦た時々忘れ難しとて、草堂を南京時代幾度訪れたるかを知らぬ程である。その文人画家たるの誠実味、看取すべきものあり。又た断じて作品を複製せず、又た他の画家をしても写させないのは有名な話で、美術界同人も此の点だけでも王祺には非常な敬意を捧げてゐる（以上「草堂集」四十三頁十九参照）。

（ロ）作品

墨意の作が大部分で、色彩のあるものと雖も極めて薄手の淡彩である。その墨色はそれこそ端溪大西洞の石からのみ出るやうな朱味を多少含んだ色であり、漆黒の墨色は殆ど見られない。その墨色の濃淡を旨く使い分けして、色彩を有するもの以上に実相を表現し、且つその墨色自体に悠遠味をもたせることに秀でて居る。

八大山人のやうな技巧はない。石濤のやうな色彩がない。さりとて石谿和尚のやうな力もない。又た蘇仁山の場合の如き突拍子もない程の大胆もない。

然し、以上の大家達の何れもがもたない味を全体として染み出させるのが王祺作品の特色であらう。そしてその上に目立つて、観るものを攫えずには置かないのは、上記の微妙なる墨色の使い方である。

山人蒐集中に、王祺に最も感動させられたのはこの墨色である。後述（10）（Ⅳ一八〇）の「越鳥南枝」の如きは正にその悠遠味の標本ともいふべき墨色である。又た色彩はつかはないが、若し一度淡彩でも使ひ出すと、丁度洋画、即ち水彩から来る味を顕著に出して来る技倆をもつてゐる。後述（11）（Ⅳ一八二）の「抗拒」、即ち

日廻り等の図の如きは正にその標本的なものである。

（ハ）王祺作品展望

梅花草堂収蔵王祺作品十四点を、例に依つて（Ⅰ）人物、（Ⅱ）山水、（Ⅲ）花鳥の三目に分けて茲に展望するのだが、根が文人画家であり、且つ創意に富んだ自由描法の大家であるから、実はこの三分も無理とさへ思はれる作品も無くもないが、茲には便宜、各種目が特に目立つてゐる点に着眼して分けて見ただけである。

Ⅰ、人物

（Ⅰ）渾欲忘世⁷（Ⅳ一七七）

昭和九歳十一月一日、上海に於ける現代大画展に需む。羅漢の如き高僧の坐禅三昧の如き情景を描写したるものなるが、画法極めて独創的なものにて、作者自身が山人に語れる話に依れば、自身最も得意とする作なる如し。

Ⅱ、山水

（Ⅱ）花樹山水（Ⅲ七四）

昭和九歳春、南京中央委員会展の呼び物たり。

（Ⅲ）辺塞微濛⁸（Ⅳ一七六）

昭和九歳十一月一日、上海に於ける現代名画大展観に於いて需めたり。独得の画法の標本なる上、精緻にして而かも創意に富む。

（Ⅳ）烟樹（Ⅳ一七八）

詩意豊かにして、作者、実におかしき程、本作に得意となり、前項同様の展覧会上、山人之を買約せる際は、本氣になりて惜しみ居

たるを想起す。

(5) 紅葉帰林(淡彩 IV一七九)

同上展覧に需む。色彩と風致棄て難く、且つ王祺として最も罕なる淡彩なる点、特筆するの要あり。右画展中の山水画にして淡彩なりしは本作のみなりき。

(6) 巖壑秋深(IV一八一)

同上展覧に需む。秋色を想見せしめて、紅葉の林間に遊ばしむるの概あり。

(7) 普陀大乘庵の図(IV一八三)

同上画展。写生にも似たり。独創味の特に豊富なる作なり。

(8) 河岸墨意(IV一八五)

昭和九歳十一月十一日、金陵經古齋主人たる沈曉峯に需む。豊潤なる墨色、得難きものといふべし。沈曉峯は湖南湘南に支店を有し、常時は湘南に在り。

(9) 秋尽黄河(IV二八五)

昭和十歳五月卅一日、金陵經古齋に需む。精品なり。黄河の大江たるを如実に想はしむる作なり。

III、花鳥

(10) 越鳥南枝(IV一八〇)(挿図3)

前記昭和九歳十一月一日の上海大画展に於いて、非売品たりしを作者と展覧会場にて直接談判の上、草堂藏品とせり。作者が一生の裡に二度とこの種の作は習作し難しと繰返し、自ら最大傑作なるを確認し居たり。

一禽、それこそ墨色一線の南枝につかまりつつ、南方を顧みるの



挿図3 越鳥南枝 王祺

(12) 洪鳥初春(IV一八四)

昭和九歳十一月十一日、前掲沈曉峯に需む。本作も、(5) 紅葉帰林・(11) 抗拒と併せて、王祺の作に最も罕なる淡彩にして、雅味特出せるは棄て難し。

(13) 群葉の図(IV二三三)

昭和十歳三月廿二日、金陵經古齋に需む。奈何にも名大家の作たるを印象せしむる佳作なり。群葉の図は中国画の古今に累々、草堂

図なるが、悠遠味とその与ふる印象は、観者に従つて千差万別なるべきが、一枝一鳥を描いて森羅万象を竭したるの概あり、人をして大自然、即ち乾坤に融け合はしむるの名作なり。

(11) 抗拒(IV一八二)

同上展に需む。小品の部類に属すべきが、一見、水絵か寧ろ油絵に接するが如き感を与へ、得難き強さと美味を蔵する佳作なりといふべし。時に山人荻窪二階書齋の床に掲げれば、趣味尽きざるものあり。殊に色彩の巧緻なる出来栄えは素晴らしきものなりといふべし。

蔵軸中にも清朝の名家、宋芝山の図（後出）もあり、又「齊白石」の別冊に叙べた通り、白石翁の名作もあり。本作は以上二点の孰れにも劣らざる出色の佳作といふべく、且つ運筆、実に自然なり。

（14）巖鷺（領導群雄 IV二六二）

昭和十歳四月十七日、金陵中央飯店に於ける王祺・汪亜塵兩人の合同大展観に出陳せられ、一般に王祺の代表的大傑作とせられ、現代名画集帖に本作は特に摘出複写せられ、且つ作者も最も得意がり居る名品たり。

第四、蕭俊賢

（イ）横顔

超然派の人々の特色は、既に窺はるる如く、何者をも師とせず、自ら古書画を友とし、独創の天地を開拓せる点が、最も共通せる点たり。茲に掲げる蕭俊賢は、字、厓泉、又た天如逸人と号し、王祺同様、湖南出身なり。山水画は、宋元を採ね、後ち更に支那の名山勝迹を周遊して造化を師とす。その氣韻、深厚なり。花卉亦た佳なり（「草堂集」九九頁三参照）。

従つてその風格が作品に表顯せられ、概ね墨色を以て自然を躍動せしむるに長ぜり。書法、亦た六法に通ず。

（ロ）草堂収蔵作品展望

I、書

（1）對聯¹³（IV五一五）

昭和十一歳九月十日、榮宝齋に需む。此種の書幅、実に稀なり。

II、山水

（2）山水（IV六八）

昭和七歳、金陵に需む。

（3）山水¹⁴（IV二八〇）

昭和九歳五月十四日、金陵夫子廟に需む。大家の作なるを一見にして印象せる程の名作なり。

（4）空江一舟の図¹⁵（IV三二六）（挿図4）

昭和九歳十月五日、田中彦造・朝海浩一郎^{あさかい}兩君と共に蘇州に遊べる砌、同地集宝齋に次掲（5）（IV三九四）「烟山霧水」と双幅として需む。最大傑作ともいふべき出来栄えなる上に、その構図の雄大なる、觀者をして大自然に遊ばしむるの概あり。田中・朝海の兩君、未だ画意を解すること無かりしと雖も、本双幅には魅せられたるの觀ありき。為に田中君次女出産の紀念に（5）を贈れり。由来を、山人、拙跋して田中家に掲ぐることに数月なりしが、田中君、山人の之に対する未練大なるを気づきて、山人が九歳十月廿日、上海藻華齋に獲たる元朝龍泉中罐（草堂一〇六四・三〇）と替ふ。今、為に草堂、双幅を蔵するに至れり。

「梅花草堂美術写真真帖」

（5）烟山霧水¹⁶（IV三九四）（挿図5）

以上（4）に述べたる通り。元来、本双幅は蘇州靈巖寺附近を生して作成し、太倉在住の徐氏に贈りしものを、右徐某が売出せるものなりといふ。

（6）山水¹⁷（IV四一八）

昭和九歳十二月一日、張一尊収蔵品の展覽に出でたるを獲たり。佳作なり。康象雲觀察の上款あり。当時、沈醉白に私淑。早年の作なるも佳なり。

挿図4 空江一舟 蕭俊賢



挿図5 烟山霧水 蕭俊賢



(7) 梅花書屋の図(Ⅳ四七二)

昭和十一歳六月廿七日、栄宝齋に需む。本作は淡彩なる点に於いても蕭俊賢作中の白眉に数へらるべし。深遠なる味を蔵し、石濤の

作品を想起せしむる名品たり。

(8) 山水(Ⅳ五〇七)

昭和十一歳八月十七日、迪華齋に需む。小品なるも面白い。

Ⅲ、花卉

(9) 墨筆芍薬⁽¹⁸⁾(Ⅳ三〇五)

昭和九歳六月二十五日、沈吉盞に需む。佳作なり。

第五、黄賓虹

(イ) 横顔

原名、質。字、樸存、又た黟^マ吳、山水を巧みにし、用筆は清朝六家の外に出づ。蒼古超逸、而かも筆致清新にして、他人の企及し得ざる風韻を具ふ。十年前、歳七十四歳なりしが、氣勢聊かも衰へず。昭和五歳、山人、北京より広東に転じたる歳、時の広東省主席、陳銘枢が山人に山水の妙品一軸を贈るも、是、後述(1)の如く、賓虹の傑作なりしなり。此の頃、山人、北京に在ること二年有余にして、現代中国画人の山水には通曉し得たる積りなりしが、その山水に接し、直感は、超然たる筆勢なるを覚えたることなり。爾来、山水画家の中に於いて、賓虹は全然当代を凌駕する絶超の存在なるを知るに至り、支那人美術通に之を説けば、必ずや山人の愚説を肯定するを常とすること、後に説く処の如し。

筆致は、墨意と淡彩とに拘らず刷筆を用ゐたるが如くにして、而かも勢あり、且つ遠近法の如き、独特の境地にありて、聊かも不自然にあらず。「手巻類」中に於いても触れたる「雁蕩山巻」⁽¹⁹⁾合作中の賓虹の作意の如きは、輕妙にして巧緻、断じて他人の追隨を許さ

ざるものあり。

(ロ) 草堂蔵作品展望

(1) 山水の図(広東へ4)(挿図6)

前項に叙べたる陳銘樞の贈軸にして、独り賓虹作品中のみならず、草堂蔵山水画中白眉の一なり。仄聞するに本作は、銘樞、特に山人の為、囑画せるものなりといふ。

「草堂美術写真帖」

(2) 扇面山水及び字(IV二七五)

挿図6 山水図 黄賓虹



昭和九歳五月三日、滬上湖社扇面展中の代表作たり。

(3) 山水墨意(IV三〇二)

昭和九歳六月廿三日、金陵青年会、兪寄凡展にありし名作なり。

(4) 合作画 賓虹石竹(IV三六一)

昭和九歳十二月九日、金陵に於ける賓虹・王濟遠(洋画派)及び謝公展(同上)三名家合作「歳寒三友」画中、黄賓虹が石竹を写せるものなり(公展は松を、王濟遠は梅花を描けり)。青年会聯合展たりき。

(5) 山水(IV四四二)

昭和九歳十二月十一日、金陵勵志社美術展に当代随一の画家作品を総羅す。その中の白眉たりしものなり。

昭和十五歳五月廿一日、陳公博・褚民誼等の国民政府使節に同行せる陳管札使節、又その随員、孫書記官等、山人蔵の本作を見て驚き、且つ山人が、賓虹は当代第一人者たりと喝破せるに、傾聴し居たるを今想起す。

第六、汪采白

(イ) 横顔

名、孔祁。号、采白。安徽新安世家也。十年前は中央大学国画主任教授たり。筆致、明朝画風を彷彿たらしむ。画法、常に純真なる支那画風たり。淡彩の用法実に妙を得たり。極めて老令なること賓虹の如く、超然且つ飄然として現代群少の画家を睥睨するの概あり。昭和九歳十一月十日、金陵五州公園内に個展を開きて、其の長子の動物画にも驚かせるが、采白の超然たる山水画には世人を全く驚愕せしめたり。色彩の用法、全く洋画印象派の用法と思はしむるの概あること、後述(1)の淡彩山水の如し。山人常に采白を呼んで当代第一流の大家となして、余り支那画人達よりも反対を聴かざりしは、蓋し宜なるかなと感ず。

(ロ) 草堂蔵作品展望

(1) 淡彩山水(IV一五三)(挿図7)

昭和九歳九月十五日、乃至十九日、第一次中国美術会展、即ち第一次上海事変最初の文展を南京中山路華僑招待所に開ける際、汪主

席と同道せる山人、采白の本作を見て当代随一と銘を打てるに、汪主席は之を肯き、傍にありし交通部長、朱家驊（当時文教部長たり）、中央大学の徐悲鴻に之を囁けば、お世辞ならんか、一同、山人の結論を傾聴せり。山人直ちに本作を買約せば、勿驚、翌日、孫科立法院長、本作の複写を囑し、即ち再定の札をさげたり。秋景にして紅



挿図7 淡彩山水 汪采白

昔在 留京時
此畫 歲久
新就 涼處
觀之 益覺
其佳 妙
乃 快 甲 秋
七月 九 日 記

葉を表象する真紅の色を中心にするなど気のききたる大家なり。又た本作の如きは、殆ど正方形と思はれる平形の中堂にして、紙面大きさに特に注意を払へるを見る。画風全く誰にもなき超然たるの風格を具へたる名作なり。

(2) 采白・余紹宋合作山水扇面 (IV二七五)

昭和九歳十二月廿四日、之を榮宝齋に需む。

(3) 仿昌陽子山水 (IV三五六)

昭和九歳十一月十日、金陵五州公園個展出陳中の最大傑作と見られたるものなり。

(4) 秋林雨霽 (IV三五七)

同上個展出陳。色彩躍動、傑作の一なり。田中・朝海・五百木三君同道、之を激賞せり。全く本作は生墨淡彩、山水従つて生動靈播。讚字多し。

(5) 紅葉鳴禽 (IV三五八)

同上個展陳。古樹好鳥、佳作なり。

(6) 采白長子、汪克劭。号、易子皖歙。

十歳十一月十八日、采白個展に併観る。

「獅子」(IV三八五)は多少固きも、佳作なり。

第七、潘天授

元中央大学国画教授にして、十年前は杭州美術学校教授たり。山水に長じ、第一流たり（「草堂集」九十頁〈三九〉参照）。

○阿寿竹谷図 (IV二六七)

昭和九歳四月廿一日、金陵第一回中央美術会展中の白眉の一たり。画風全く独特にして混乱せる線の如くに初め印象し乍ら、実は整然

たる上、正統の山水様を示し、佳作たり。

第八、曹玄宇

日本東京芸術高等工業学校を卒業し乍ら、作画を好み、遂に十年前南京に於いて画を教へ、杭州美術学校教授に聘せらる。画風自由にして筆勢大なる上に、日本在学中の影響か、構図、日本画的なるを特色とす〔草堂集〕六十九頁参照。

○瓜棚と蛙⁽²⁶⁾ (IV三三八)

昭和九歳四月二十一日、中美会第一次全国展(前出) 出陳の逸品たり。

「梅花草堂美術写真帖」

第九、王顯詔

嶺南、即ち粵南画家にして、書法にも通じ、作品少きも筆力実に超然たるが故に、茲に掲ぐ。韶関に生まる。画亦た少きも一派をなす。

(1) 古柏の図⁽²⁷⁾ (IV四二)

昭和五歳五月廿五日、羊城に獲たり。

(2) 字条 (IV二六五)

第十、閔羅張

江西省九江の人。筆力雄渾を以つて名あり〔草堂集〕九十頁(十八)参照。

昭和五歳十二月、山人、広東より湖南省に徒歩にて長沙に抜け、更に共党見学の為、南昌に赴き、上海・厦門・汕頭・東江地方經由

し、所謂華南の大冒險旅行の途次、九江に於いて羅張作の二点を手に入れ、その豪放にして超然たる作意に喫驚せり。即ち次の二点なり。双幅ともいひ得べし。未棧のままを購ひて羊城にて装裱せり。

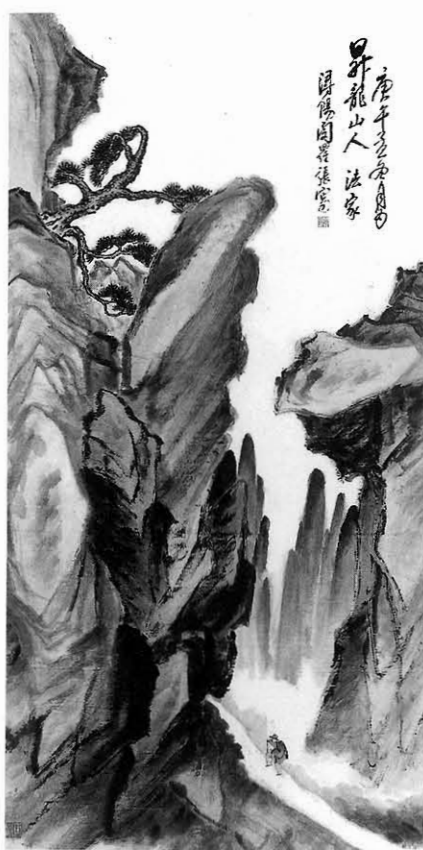
(1) 匡廬の図⁽²⁸⁾ (へ6)

(2) 五老峰の図⁽²⁹⁾ (へ7) (挿図8)

孰れも筆太にしてセザンヌの風景にも似たり。而かも中国の生粋を尽せり。

第十一、石霞和尚

挿図8 五老峰の図 閔羅張



瑞光和尚の如き筆致にして、粵南の僧院にありて画事を職とす。筆勢侮り難く、総べて超然たる点より本派に入るべき画家といふべし。

○山水 (へ5)

昭和六歳、広東国画展にて獲たり。風味棄て難きものあり。

第十二、結言

結局十人の画人を捉し来たつて概評をして見ると、超然派で纏まり多く、傾向に一致したことが読める。勿論冒頭にも述べた様に、雑然たる支那画壇を明瞭直截に分けるなどといふこと自体が無理なのだが、鑑賞・批評の便宜上から一定の区分をすることは必要であることが、この超然派をまとめて見て極めて明瞭に会得される。

この派でも、張大千・王祺・蕭俊賢の三大家が根城であることは勿論であり、自然三者の作品についての説明が細やかになつてゐたのである。

後記（昭和廿一年九月二日）

梅花草堂蔵品中「理想派」（一四五）について叙べた所は、概ね茲に移して考へることが出来る。勿論もつと卒直にいへば、白石翁や姚華などが理想派に合致するともいへる。つまりそれとこの超然派とを合せたものが、西国現代画壇の理想派といへうか。別段さう合流するやうに分類をしたのでない事は明らかであるが、今、西国現代画壇をも合せて考へると、そこに自ら無限の味が出て来るのは面白い。

須磨ノート58「京滬洋画派」

京滬洋画派

昭和廿歳九月二日

洋画派（京滬派 五八）

例言

ミズリー号上の歴史的調印式実況放送を聴く為、九月一日夜、不眠の間に書き了へた。この稿亦た想出多き哉。昭和廿年九月二日、稿。

再記。（昭和廿一年一月三日）

四ヶ月、本稿再観。感慨深きものあり。この派に属する人々の横顔の項、特にこの大変局のため一層光彩を添ふべき此等の人々の進出を伝ふるものあり。

洋画派

目次

第一、まえことば

第二、徐悲鴻

（イ）横顔

（ロ）作品

（ハ）草堂収蔵品展望

I、書

（1）対聯（IV四九九）

II、動物

（2）駿馬素描（IV一九九）

（3）松鶴（IV二二四）

（4）千里馬（IV二三七）

（5）松鳥（兪寄凡合作 IV三〇四）

（6）白馬（IV三九七）

（7）榕樹小禽（IV三九八）

（8）驚艷（猫 IV四一一）

(9) 飛鷹(独掌天下 IV四一二)

(10) 鵝伏(IV四五二)

(11) 双猫芭蕉(IV四六九)

(12) 柳鳥(IV四七〇)

(13) 松上老鼠(白石翁合作 IV四九八)

(14) 梅枝双鳥(IV五〇〇)

(15) 水牛(IV五一〇)

(16) 烏臼黄鶯(汪亜塵合作 IV二六一)

III、山水及び樹木

(17) 黄山松樹(IV二三〇)

第三、劉海粟

(イ) 横顔

(ロ) 作風と作品

(ハ) 草堂収蔵作品展望

I、人物

(1) 昇龍山人像素描(海翁と章衣萍合作 IV一〇七)

(2) 同上(海翁と王孝古合作 IV一〇八)

II、風景

(3) 洪濤悲嘶(IV七〇)

III、花鳥

(4) 紅梅(IV六九)

(5) 梅花と鳥(王二亭合作 IV七二)

(6) 鷺鷥(IV四〇七)

第四、王濟遠

(イ) 横顔と作風

(ロ) 濟遠の洋画

(1) 室内(洋四二)

(2) 伊太利の女(洋四三)

(3) 雨後の西湖(洋四四)

(4) 中山陵紅葉(洋四五)

(5) 杭州紀念館(洋一二二)

(6) 秦淮河辺(洋一二二)

(ハ) 国画

(1) 昇龍山人像素描(IV一〇九)

(2) 香港夜雨(IV三五九)

(3) 歲寒三友(黄賓虹及び謝公展合作 IV三六一)

第五、汪亜塵

(1) 鍾進士の図(IV二五九)

(2) 孤禽柏樹(IV二五七)

(3) 四腮鱸(IV二五八)

(4) 古柏寒鴉(IV二六〇)

(5) 黄鶯(徐悲鴻合作 IV二六一)

(6) 游魚(IV二五六)

第六、呉公虎

(イ) 横顔と作品

(ロ) 草堂収蔵作品展望

I、風物画

(1) 古城(IV一五五)

(2) 煙雨山林(風雨帰途 IV一五六)

(3) 嶺南光塔煙雨(IV一五七)

- (4) 嶺南春色 (IV一六四)
- (5) 西湖秋色 (IV一七〇)

II、花卉

- (6) 臨陳樹人老松双鳥 (IV一五八)
- (7) 荷鳥 (荷塘釣魚 IV一五九)

第七、容大塊

(イ) 横顔と作風

(ロ) 草堂所蔵作品展望

I、風物 (山水)

- (1) 北高峰 (IV九九)
 - (2) 望鷄鳴寺於五州公園 (IV一〇〇)
 - (3) 龜頭渚 (IV一〇一)
 - (4) 灘山漁泊 (IV一〇二)
 - (5) 和平門 (IV一〇四)
 - (6) 六榕暮靄 (IV一〇六)
 - (7) 築堤 (IV三三〇)
 - (8) 黃山の図 (IV四二三)
 - (9) 四川山水 (IV四一四)
 - (10) 粵都大塔 (IV四一五)
 - (11) 泯江曉渡 (四川 IV四六七)
 - (12) 桂江漁泊軸 (広西 IV四六八)
- ## II、動物及び花卉
- (13) 老虎墨意 (嘯虎 IV三九九)
 - (14) 秋景 (IV一〇三)
 - (15) 翠羽新篁 (仏山 IV一〇五)

第八、張書旂

- (1) 春水綠波 (IV三四七)
- (2) 桃花 (IV三四八)
- (3) 葵花小鳥 (IV三五三)
- (4) 白鴿 (IV三九一)
- (5) 南瓜 (IV三五四)
- (6) 揚鶴 (IV一五一)

第九、謝公展

- (1) 夕陽蓮 (IV二一二)
- (2) 花鳥と蘭石 (IV二二三)
- (3) 墨蘭 (IV二二四)
- (4) 菊花の図 (合作 IV三九二)
- (5) 新柳梅花 (IV五二八)

第十、王震

- (1) 羅漢大幅 (IV一二三)
- (2) 字幅 (IV一二四)
- (3) 無量寿仏 (IV四四五)

第十一、俞劍華

- (1) 奇峰矗天 (IV一四四)
- (2) 華山仰天池 (IV一四五)

第十二、樓辛壺

I、書

- (1) 仿黃山谷書条 (IV三六七)
- (2) 老莊字条 (「人之力」 IV三六八)
- (3) 対聯 倩太白金仙書 (IV三六九)

II、山水

- (4) 山水(仙巖瀉瀑 IV 三六五)
- (5) 風雨琅玕圖(IV 三七〇)
- (6) 青綠山水「吳汭^ヌ萊蓼」(IV 四〇四)

III、花卉

- (7) 菊花(IV 四〇七)
- (8) 墨梅(IV 三六六)

第十三、諸聞韻

- (1) 仏像(IV 二四五)
- (2) 松下の鳥(IV 二四六)
- (3) 墨猫(IV 二四四)
- (4) 鉢景(氷厨清供 IV 二四七)
- (5) 菊花(IV 二四八)

第十四、何遂

- (1) 雲松(黄山写松 IV 四〇一)
- (2) 羅漢峰(IV 四〇二)
- (3) 山水二景(連理松・絃歌溪 IV 四〇三)
- (4) 山水二景(松林峰・天都峰天橋 IV 四〇四)

第十五、胡猷雅

- (1) 山谷詩書(IV 二五三)
- (2) 金焦の図(IV 二五四)
- (3) 滕王閣(IV 二五二)
- (4) 秋山霧靄(IV 三四六)
- (5) 風雨同舟(山人題 IV 一五二)
- (6) 良馬(IV 二五〇)

- (7) 「過」(山人題 IV 一五四)

- (8) 歲寒(雉 IV 二五二)

第十六、結言

目次 終。

洋画派

第一、まえことば

梅花草堂往来「現代国画分野展望」第二(三十五頁)に於いて陳べた様に、上海・南京、即ち江蘇・浙江両省を根城とする十四名を茲に拉し来つて草堂収蔵各作品を記述するのであるが、洋画派といつても、純粹な国画から見れば洋画風であるといふだけであり、必ずしも洋画に類するといふ作品許りではない。

尤も徐悲鴻といひ、劉海粟といひ、王濟遠といひ、何れも洋画家として立つてゐると観る方が正しい位ゐの水陸両棲といった画家達がこの一派の中心である点は、本派の特色を最も雄弁に物語るものである。その他、汪重慶にしても、吳公虎にしても、洋画家ではないが、少くともその作風は水絵に類してゐる。若しそれ容大塊に至つては題材も構図も全く水絵と選ぶ処はない。尤も、謝公展・王一亭・俞劍華・諸聞韻・樓辛壺等に至つては水絵とも洋画とも似もつかぬ存在であると思はれるが、他の純国画派や超然派、又は中間派から見れば、矢張この洋画派に近いと見るべきであり、尠くとも上海・南京を根城としてゐる点からでもこの部類に入れて置くことが強^{あなが}ち無理でもない。

胡猷卿の如きは、古い方でもあり、画法も固いので、洋画派とは似てもつかぬといへるけれども、その固さに於いて、又その色彩の

鋭さに於いて、この部類に入れることが不自然でもあるまい。

若しそれ何遂や葛孝彝や胡猷雅に至つては、胡猷卿程の無理は生ぜられない而已ならず、殊に胡猷雅の風景画風、例へばその郷里である「滕王閣」の図なんぞは水絵でもある。

そして張書旂に至つては、器用であるからどんな絵でもものするが、「春水緑波」の如きは全く洋風の作品ともいへるから、本部類に入れることは断じて無理ではない。

要するにこの派に入れた画家は、時代の雰囲気として自然に洋画風をその作品に万遍なく取入れたる点が共通であり、それを洋画風と呼ぶことが一番妥当であるやうに思へる。即ち十六人の作品の共通性もさる事ながら、全部のトーン（基調）となりたるモチーフが洋画的である点是否まらない。

第二、徐悲鴻

劉海粟・王濟遠と支那洋画界に鼎立し、南京中央大学の腕利きとして肩で風を切つて歩いてゐるハイカラな、又た事実相当スマートな存在が徐悲鴻である（「草堂洋画」九九頁）。

（イ）横顔

浙江省生れで人物画家の徐達章の子である。東海王孫と号してゐる。その野心や観るべしである。洋画家としても内外に知られ、仏蘭西留學生である。その夫人も才媛で絵筆もとる所から、一層、国民革命・三民主義、首都南京時代には新生活運動のホープでもあるやうに横行闊歩し、汪精衛・朱家驊（当初文相にして後に交通部長となる）等の要路に出入し、飛ぶ鳥も落す勢で、洋画界では勿論第一人者を以て自他共に許し、又た国画界でも大変な高位にあると

自任し、白石翁とも合作をやるのが、例へば後述（13）（IV四九八）老鼠の図に於いて見る通りであり、苟くも中国画壇では第一人者であることを到る処に主張してゐた。

仏国在住時代に余程の勉強をしたらしく、その動物の写生などはガツチリとデッサンを固めてゐる。馬なり、猫なり、鷹なり、その動物の作風は事実立派なものである。写实的で而かも、仕上げが気が利いて清楚である（「草堂集」七十二頁（十五）参照）。

東亜覚醒の政治家として、汪精衛の片腕として活躍し、遂に河南で刺客に斃れた鉄道部次長、曾仲鳴君は、一面仏蘭西通で詩人であり、これも仏国に在住し、古唐詩の仏訳をして有名だったのだが、同君は徐悲鴻とは仏国に同時に留学してゐたので、よく山人に悲鴻を褒めちぎり、その仏国在学中、実に努力家で勉強したものだと言つてゐたが、その努力がその作品の上に躍つてゐる。

何事によらず、秀でるには天才よりも努力であることが、悲鴻の作品の上にも観られるのである。

（ロ）作品

その洋画家としての素質から来る癖と筆勢とは争へないが、作品には国画家としての本来的な特色が充分に表現されてゐる。その父も画家であつたといふ処からも来るだらうが、山人が数回悲鴻の画室をのぞいて思ふのであつたが、その支那古画に対する趣味と研究とが大変なものであることが、その書籍・参考画帖・写真帖等によつても知られた。努力家だけに古今の中国画壇を通観してゐるのだから、それから来る作品の裏づけが大きい。どの作品にも本来の国画家の運筆と気魄とが漂つてゐる。例へば後出Ⅲ山水及び樹木の項

の(17)(IV二三〇)「松樹」の如きは松籟颯々たる写実があると同時に宛かも草堂蔵の徐渭天池の「五大夫図」に見るやうな支那画の伝統的な悠遠性が染み出て来る。それが悲鴻の学殖であり、伝統であり、努力であらう。

作品はガツチリして建築的な構造をもつてゐる。そして清楚でサツパリしてゐる。器用さが勝ち過ぎてゐるといつた感じが多少なりとも見出される作品が無いでもないが、先づ大作に於いて、よく研究し遂げた抜け目のない作品が多い。自然、彼の作品が現代画家中では一番高値を呼んでゐるのは決して時流を上手に泳いでゐる悲鴻の画家的巧緻からばかり来てゐるといふのは酷評に過ぎやう。

(ハ) 草堂収蔵品展望

I、書

(1) 対聯(IV四九九)

昭和十歳八月二日、善徳堂主人、譚開先に需む。文に曰く、

詩心寄歸雁、

人意狎間鷗、

書道も普通ではない。矢張相当なる風格を有す。(4)(IV二三七)及び(6)(IV三九七)等と共に伯林の近代支那美術展観に出陳されたものなりといふ。

II、動物

(2) 駿馬素描(IV一九九)

昭和九歳十一月十二日、清翰齋主人、沈曉峯より贈らる。悲鴻自身が袈装の謝礼として沈君に之を贈れりといへり。無落款なるも実

に佳作なり。

(3) 松鶴(IV二三四)(挿図9)

昭和九歳十二月十二日、交通部朱家驊が山人と通信協定を締結し、又た旧交通部借款整理の折衝をなし大体片附きたる機会に、そのフアブオリト(favorite)とも観られ居たる悲鴻に山人の上款入りにて描かしめ、之に更に悲鴻の「須磨弥吉郎」の古石図章篆刻を添へて贈附せるものなり(「文具考」五十八頁第十号)。

老松上に孤鶴、四周を瞰睥するの図にして、大作なる上に落着の

挿図9 松鶴 徐悲鴻



ある名品といふべし。その後、悲鴻、山人宅に來訪の際、本作に談及び、悲鴻の需めに依りて之を示すや、自作に恍惚たるの風を示し居たり。

「梅花草堂美術写真真帖」

孰れにせよ悲鴻屈指の名作にして、動物花鳥に特に傑出し居る作者の代表的のものといふべし。

(4) 千里馬図(IV二三七)

乙亥春仲。

昭和十歳三月三十日、榮宝齋に獲たり。一見無造作の如くにしてその作品の項に於いて略叙せる通り、実に水も洩らさぬ程のガツチりせるデッサンを基としたる名品たり。

「梅花草堂写真帖」

(5) 松鳥 (兪寄凡合作 IV二〇四)

昭和十歳六月廿三日、金陵青年会の寄凡個展中の呼物たり、名作といふべし。

(6) 白馬の図 (IV三九七)

昭和十歳十一月廿三日、善徳堂名画展に需む。曾て独逸柏林に於ける中国画展に出品せられ大好評を博せる力に充ちたる名作たり。而かも、その線の簡單なるに、構図独特なる点は、悲鴻作中の白眉となすの値打ありといふべし。同じく中央大学中国画部教授の陳之仏君の如きは、是程の逸作は悲鴻として空前なりと激賞し居たり。中国画とは思へざる洋画風であり乍ら、而かも争へざる東洋画風を存し、全く得難き逸作なり。

「梅花草堂美術写真帖」

(7) 榕樹小禽 (IV三九八)

同上の善徳堂展所陳の佳作にして力作といふべし。

(8) 驚艷 (猫の図) (IV四一一) (挿図10)

昭和十歳十一月廿四日、金陵善徳堂名作展所獲。絶品とも謂ふべき珍品にして、構図等一切独特であり乍ら、軟か味に富み、且つ自然に見ゆるは、全く大家の風を存する名作たるを証すといふべし。

(9) 飛鷹 (IV四一二) (挿図11)

(民国廿四年十月作)

挿図10 驚艷 徐悲鴻



挿図11 飛鷹 徐悲鴻



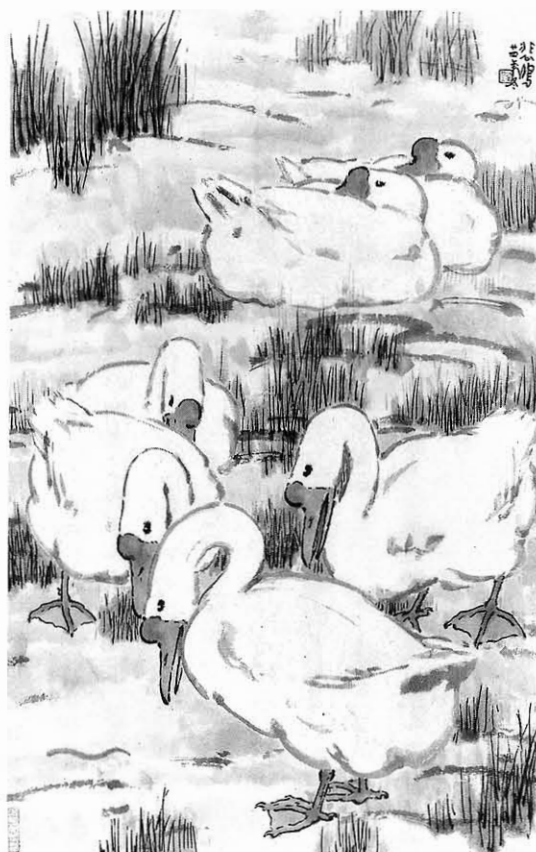
同上善徳堂展に獲たり。「独掌天下」と別題せらるる佳作中の絶佳品とせらるるものなり。此の画題は決して少しとせざるものなるも本作はその種類を超越する逸品なり。

「梅花草堂美術写真帖」

(10) 鵝伏 (IV四五二) (挿図12)

昭和十歳二月九日、譚開先に獲たり。全く佳作中の逸品たり。

挿図12 鵝伏 徐悲鴻



(11) 双猫芭蕉(Ⅳ四六九)

昭和十歳五月廿二日、金陵太古堂に獲たり。作意特別の風味を蔵する逸品たり。

(12) 柳鳥(Ⅳ四七〇)

民国廿五年作。

同上、太古堂に獲たり。

(13) 松上老鼠(合作 Ⅳ四九八)

悲鴻画松。齊白石翁画老鼠。珍とするに足る合作たり。

昭和十歳八月卅日、譚開先に需む。冕階上款。作詞は名家、曾霜厓題。

(14) 梅枝双鳥(Ⅳ五〇〇)

昭和十歳八月三日、譚開先に獲たり。風格氣品の勝れたる逸品と

いふべし。

(15) 水牛の図³⁵(Ⅳ五一〇)

昭和十歳八月十八日、金陵經古会に獲たり。

(16) 鳥白³⁶(Ⅳ二六一)

悲鴻画鳥白、汪亜塵画黄鶯(第五汪亜塵の項へ5参照)合。

昭和十歳四月十七日、汪亜塵及び王祺合同画展(青年会)に於いて需む。単に合作としてのみならず、汪亜塵の多様性を知る上に於いても重要な作たり。悲鴻が、汪も洋画派の幹事役の如く立ち働かしめ居る点は、例へば本作の如き合作を為す所以なりと思はる。

Ⅲ、山水及び樹木

(17) 松樹(Ⅳ二三〇)

昭和十歳二月廿七日、国府路宝文齋展覽会の白眉にして松籟颯々たるを想はす。主席、林森が二度までも本作を入手し度として価格を訊ね居れるものなりといふ。後に至りて、悲鴻、本作が山人宅楣間にあるを見て驚き、本作は作者が六回に亘り黄山に杖を曳き、数十点の写生を遂げ、それより仕上げたる唯一のものなりとて、山人蒐藏中に本作入れるを喜ばしと謂へり。

第三、劉海粟

(イ) 横顔

浙江省武進の人。芸術叛徒と号する点より見て、その野心の大きなを知るべし。字、海翁。画は山水・花鳥共、古法なるに拘らず、斉しく新味を蔵す。

又た油絵を能くす。昭和七歳頃より上海美術学校長たり。南京中

央大学、徐悲鴻は元海翁の門下に在りしも、暫くして、相拮抗対峙して共に下らず。海翁には天才的閃めき多く、十中の一二点は何人も企及し得ざる名作を作る。外国人との交際も年に入つたものにて、それが二回に亘る洋行の結果にも依るも、本来此方面の才にもたけ居る為、その方にも名声を挙げ、西洋画に於いては第一人者を以て許さる。

(ロ) 作風と作品

以上の横顔については「草堂集」五十二頁(23)参照。而してその作品中、油絵は最も眼につく。一九三二年、上海市長、呉鉄城主催の現代名画展の呼びものなりし海翁油絵の二点、即ち(Ⅰ)「草堂洋画」一二三「牛」、(Ⅱ)「草堂洋画」一二四「瑞西風景」は何れも倫敦に於ける中国画展に出陳、好評を得たる名品にして、前叙の如く百中二三の海翁天才的閃めきの産物にはあれど、傑出せる佳作にして、殊に(Ⅰ)「牛」の如きは海翁画集の表紙にも原色版にて掲げられ居り、全くの名作にして、山人草堂洋間には常に之を愛用せり(「草堂洋画」第四へ乙へイ九五頁参照)。

自然、海翁の作風には洋画風の線及び点を存するのみならず、全体の結構に於いて、或は作の色彩に於いて洋風たるは争はれず。但し一度国画を作らば、是亦た美事なる作風にて、後述(6)(Ⅳ四〇七)「鸛鷺」の如きは国画家の誰もが驚く程の東洋風を蔵す。器用なる芸術家たるは否まれざるなり。

(ハ) 草堂蔵作品展望

I、人物

(1) 昇龍山人像素描(Ⅳ一〇七)(挿図13)
海翁と章衣萍合作。

(2) 昇龍山人像素描(Ⅳ一〇八)
王孝古獅子と海翁合作。

以上二点共、一九三三年秋、山人、滬上に於いて上海総領事たり

挿図13 昇龍山人像素描 劉海粟



し石射猪太郎君等、同僚と共に、市政府の招宴の第二次会に、海翁・王濟遠・章衣萍・王孝古等の文人(詩人)墨客を携えて月廬家に小宴を設く。山人、興至りて劍舞を行へば、画人は筆紙を寄せて写生し、詩人は即興詩をものし、忽ち成りたるもの、上記二点なり。他、王濟遠及び章士釗の作れるもの、他に二点あり(王濟遠へハのへ1本稿83頁参照)。孰れも滬上時代の記念とも云ふべき、作品としても実に軽妙なる風味を有するものなり。

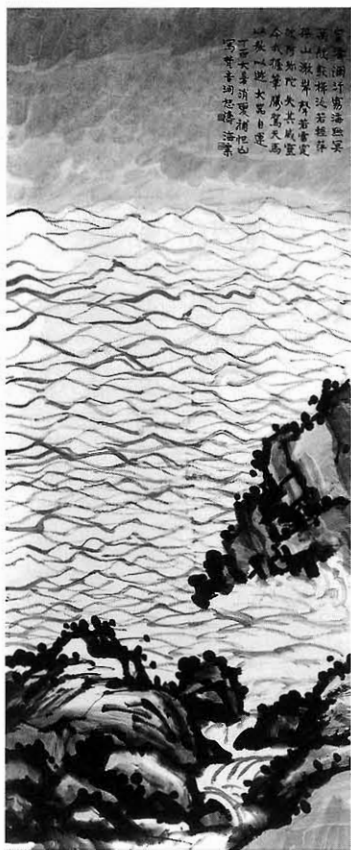
II、風景

(3) 洪濤悲嘶⁽⁴⁰⁾ (挿図14)

昭和七歳(一九三二年)、上海市長、呉鉄城主催現代名画展出陳の墨色画中の白眉とせられたる佳作なり。殊に近景たる巖角の濃くして強き墨色なる洪濤の描写法が、白石翁の如く、度々軟かなる刷筆の如き線条を用ゐたる。是亦た海翁の天才的閃めきの見ゆる罕觀の作といふべし。

「草堂美術写真帖」

挿図14 洪濤悲嘶 劉海粟



III、花鳥

(4) 紅梅 (IV六九)

同上、上海市政府画展。

(5) 花鳥 (IV七二)

海翁と王震(一亭)合作。同上画展。

(6) 鷺鷥墨意 (IV四〇七)

昭和十歳十二月十五日、金陵華僑招待所現代名画展に全国名画家の出品燦たるものなりし裡の白眉たりし名作にして、画集にも掲げ

られ、殆ど海翁作の国画としては最大傑作たるを疑はざるべし。

前叙の作風中にも触れたる如く、本作なんぞがあればこそ、海翁は洋画家に止まらず国画家としても大家たるを知らしむるものなり。
要之、海翁の人物人柄が南方人に似ず茫洋たる風ある如く、作品にも何処となく大きな点を蔵すること、特色の一たらんか。

第四、王濟遠

(イ) 横顔と作風

劉海粟校長の下に上海美術学校副校長たり。仏・伊等に遊ぶ。洋画は海翁及び悲鴻と共に現代の三大家をなす(「草堂帖」九一頁へ七一参照)。

然れども国画に励むこと亦た精しく、特に揚州八怪を研究し、殊に金冬心に思ひを窃かにせること深く、その白梅の描法の如き、全く金冬心の詩意を得たり。人物亦た大人の風あり、寧ろ北方出身を偲ばしむるの風格あり。物腰亦た軟かにして、又た日本に遊びしこと永きが如く日本語を能くす。

(ロ) 濟遠の洋画

茲に洋画を説明するはその所にあらむといへども、草堂収むる処の濟遠の洋画を一挙し置かむ。

(1) 室内 (洋四二)

所謂インテリオール研究にして、色彩面白し。

(2) 伊太利の女 (洋四三)

在仏伊時代の試作、名品たり。

(3) 雨後の西湖⁽⁴¹⁾ (洋四四)

(4) 中山陵紅葉⁽⁴²⁾ (洋四五)
色彩の対照美に佳なり。

(5) 杭州紀念館 (洋一二二)

(6) 秦淮河辺 (普陀山風景 洋一二二)

等の洋画は、全く東洋離れのせる作風を有し、棄て難きものあり
〔草堂洋画〕九十七頁参照。

(ハ) 国画

(1) 昇龍山人像素描⁽⁴³⁾ (IV一〇九)

濟遠と李士超との合作なるも、海翁作品 (1) (IV一〇七) 及び
(2) (IV一〇八) と同時の作品たり (本稿70頁参照)。

線細やかにして何処となくおとなしく、又た金冬心作品の面影を
有す。

(2) 香港夜雨⁽⁴⁴⁾ (IV三五九) (挿図15)

昭和十歳十一月八日、金陵首都飯店個展の呼びものにして、刷筆
の如く、又た文晁の作にもある如き烟雨の描法をも用ゐたる佳品に
して、王濟遠の作品としては出来過ぎたる程なり。墨色、国画と洋
風とを併せ得たるの感あり。

「梅花草堂美術写真帖」

(3) 歲寒三友⁽⁴⁵⁾ (IV三六一)

黄賓虹及び謝公展と三者合作たり (「超然派」第五、黄賓虹作品
へ4へ八八頁参照)。

第五、汪亜塵

王祺にも私淑せるも、概ね徐悲鴻・劉海粟等と交遊し、全く本派



挿図15 香港夜雨 王濟遠

の幹事役の如き風格を有し、この派の中に於いては余り匂しからざ
るも、その社交術の巧妙なる点等より中央画壇に相当の重きをなせ
り。今その作品中、草堂收藏の分を掲げること次の如し。

(1) 鍾進士の図 (IV二五九)

昭和十歳四月十七日、汪及び王祺合同展 (於中央飯店) に求む。本作、ひとり同展に於ける白眉のみならず、汪の最大傑作なりとて、作者自身も得意にしてその作品画帖に掲げ居たり。色も構図も傑出せり。

(2) 孤禽柏樹 (IV二五七)

同上展。精品なり。画集に在り。

(3) 四腮鱸 (IV二五八)

同上展。画集に在り。構図としては最も重要作といふべし。

(4) 古柏寒鴉 (IV二六〇)

同上展。同様、画集にあり。構図、最佳なり。

(5) 黃鶯 (徐悲鴻合作 IV二六一)

同上展。悲鴻画烏白。汪は画鶯。奈何に汪亜塵が悲鴻の事務総長格として中央画壇に幅を利かせ居たるかを物語る意味よりも、重要な作たり (徐悲鴻作品へ16) 即ち60・I頁参照)。

(6) 游魚 (IV二五六)

昭和十六年初頭、秋田丸にて東京より赴西の途次、広島より布哇^{ハワイ}に出稼せる高橋敏雄君に之を贈る。精品にして棄て難きものある作なるが、その後、大東亜戦となり、敏雄君及びその伯叔父等の消息や如何。又その郷土広島は八月七日のATOM弾にて灰燼に帰し、その一族の消息、是亦た如何。往來を認めて思はるること共、尠しとせず。

第六、吳公虎

(イ) 横顔と作品

東京美術学校に学び、日本語巧みにし、好人物たるの感を与ふ。

広東人にして、高奇峰に学ぶ。又た陳樹人にも師事せり。為に寧ろ中間派にも属せしむべき画家たるも、その作風は洋画家風にして、且つ常に南京・上海を馳驅し、是亦た汪亜塵同様、徐悲鴻・劉海粟・王濟遠と交遊繁き点より、寧ろ本派の集団に入るべきものなり。而して当初は日支西画風を併用せんとせるの感なきに非ざるも、その東京在学中の日本画壇の傾向にしてからが元来洋画の影響を隠し得ざりし時代とて、結局洋画派の重鎮たる資格を具ふるに至れり (「草堂集」四十一頁参照)。

而してその作風は風景の水絵を軸の形とせることが特色なりともいひ得べきものにして、寧ろ後述第七、容大塊と同系同種の作品をものすといふことを得べし。

(ロ) 草堂收藏作品展望

I、風物画

(1) 古城 (IV一五五)

昭和九歳十月七日、中央飯店個展に需む。筆勢強く佳作たり。

(2) 煙雨山林 (風雨帰途 IV一五六)

同上展、佳作なり。

(3) 嶺南光塔煙雨 (IV一五七)

(4) 嶺南春色 (IV一六四)

昭和九歳十月八日、同上展に獲たり。風物画の佳作なり。前項(3)の光塔と共に嶺南風物画にして、嶺南がその故里故、後述第十五、胡猷雅作品(3)その郷里の南昌滕王閣の図と併称し得る程の上出来たり。支那画に於いて郷土の風物画をよく描く者多し。勿

論我が日本画壇に於いても、例へば広業の秋田十和田湖風物画多きが如きは、その同類例たりといふべし。公虎、夙に此の原則を話すを常とせり。

(5) 西湖秋色⁵¹ (IV一七〇)

同上展にて昭和九歳十月十日、獲たり。といふよりは、風物画中得意の作なりとて、作者、本作を草堂に贈れり。

II、花卉

(6) 臨陳樹人老松双鳥⁵² (IV一五八)

樹人に私淑せる彼としてこの作あるは当然なるも、樹人の如き軟かさなく、そこは本派に入るべき洋画派の称ある所以といふべし。

(7) 荷鳥⁵³ (荷塘釣魚 IV一五九)

容大塊合作

同上展。合作として罕に観る渾融作たり。是れ公虎も大塊も共に広東出身にして、又た広東の大家に私淑しながら、兩人共洋画派に入るべき素質を有する為なりと見ることを得。

第七、容大塊

(イ) 横顔と作風

同じく広東人にして高奇峰・高剣父両師に就き、且つ洋画の研究にも専念し、一派を形成するに至れりともいふべく、その写生風は独特にして、特に風物の写生は軽快にして、而かも実感を把握し、且つ詩趣を漲らしむる画法は実に当代に於いて最も注目すべき画家たるに至れり(「草堂集」四十二頁へ一五参照)。

その作風の代表的なるは、後述(2)「望鷄鳴寺於五州公園」(IV

一〇〇)の如きは、全くの詩趣そのものにして、金陵の個展に於いて、山人、之を購ふや、汪精衛、又た再定し、次いで立法院長たりし孫科、之を三定して新聞記事の種となるに至れるは、宜なる哉と思はる。日本画にも、氣に入りたる作品を複製する画家及び好き者あり。支那に於いては再定・三定、多きは五六枚も注文あることあり。ヘボ作家は、山人などに先づ買約せしむれば二三複製あるべきを見越し、山人には寄贈する故、買約を申入れ来る者ありき。西洋に於いてもまれに非ざるも、支那画壇に特に多し。墮落たるを免れず。

(ロ) 草堂所蔵作品展望

I、風物(山水)

(1) 北高峰⁵⁴ (IV九九)

昭和九歳、金陵中山大路の華僑招待所の個展を、大塊若年にして一生の初振出の機会に、山人、その上記の如き作風に褒れ込みて獲る所多く、為に世評とみに揚れるの感あり。本作の杭州北高峰を、水絵風に構図も面白く製作せり。

(2) 望鷄鳴寺於五州公園 (IV一〇〇)

同上展。前項作風の項に述べたる通りにて全展中の白眉たり。又た独り大塊ものとしてのみならず、現代国画風物作品中、未だ曾て如斯傑作を見ず。即ち、

六朝興亡幾變遷、

秋風颯々梵鐘鳴、

寒鴉三四不語古、

鷄鳴寺辺転万感、

と山人駄句れるはこの作を見たる瞬間なりとす。素より平仄に合はずと雖も、金陵城、否な寧ろ「国亡有山河」の支那の表象ともいふべき鶏鳴寺の感懷を如実に画面に縹渺せしめたるものは本作なりと謂ふべし。

(3) 鼇頭渚 (IV一〇二)

同上展。筆意輕妙にして而かも力強き作なり。殊に構図勝れたるものといふべし。

(4) 灘山漁泊 (IV一〇二)

大塊の最も得意なる水辺を最も有意義に仕上げたる作なり (11) 参照。

(5) 和平門 (IV一〇四)

南京の昔の風物たるのみならず、創意多し。

(6) 六榕暮靄 (IV一〇六)

羊城 (広東) の六榕寺の風物如実なり。山人、親友、鉄禪和尚をも想起し、且つ蘇東坡書額「六榕寺」をも想起すことを得る作なり。風物画の域を脱する詩意あり。

(7) 築堤 (IV三三〇) (挿図16)

昭和十歳十月十五日、第三届中国美術会 (文展) に獲たり。(4) 灘山漁泊もこの種なり。又 (11) 参照。

「梅花草堂美術写真帖」

(8) 黄山の図 (IV四一三)

昭和十歳十一月廿四日、善徳堂展に獲たり。佳作なり。

(9) 四川山水 (IV四一四)

同上。絶佳作なり。

(10) 粵都大塔 (IV四一五)



挿図16 築堤 容大塊

同上。風物画として絶佳なり。

(11) 泯江曉渡 (四川 IV四六七)

昭和十歳五月廿二日、華僑招待所展に獲たり。(7) 及び (4)

も同種なり。大塊の最も得意とする所なり。

- (12) 桂江漁泊軸⁽⁵⁸⁾ (広西 IV四六八)
同上。

II、動物及び花卉

- (13) 老虎墨意 (嘯虎 IV三九九)

昭和十歳十一月廿五日、善徳堂展に獲たり。力作なり。風物画が概ね水絵の如く洋画派の本領を表はせるが、本作に依りて国画の本領をも發揮、流石奇峰⁽⁵⁹⁾に師事したる所以を知るべし。

- (14) 秋景 (IV一〇三)

日本画の軟かなる味あり。

- (15) 翠羽新篁 (仏山 IV一〇五)

広東時代に仏山にて写生せし早年作なるも、色彩も構図も達者にして、宛然晩作の如し。

第八、張書旂

中央大学教授。花鳥が最も得意なる張書旂の題目なるも、山水亦た可なり。花鳥に於いては現代第一人者と称せらる。年齒未だ多からざるも最も将来あり〔草堂集〕七〇頁参照。

- (1) 春水緑波 (IV三四七)

昭和十歳十一月九日、華僑個展中の逸品にして画集に在り。罕觀の佳作なり。水絵の如し。

「草堂美術写真帖」

- (2) 桃花⁽⁵⁹⁾ (IV三四八)

同上展。力作にて特に佳なり。

- (3) 葵花小鳥⁽⁶⁰⁾ (IV三五三)

力作なり。

- (4) 白鴿⁽⁶¹⁾ (IV三九二)

昭和十歳十一月廿二日、安樂飯店に於ける善徳堂慈善賑災展にて、三十五弗⁽⁶²⁾にて買ふ七駿冊 (郭熙) を売り得ずとて、その代償として、又た謝罪として本作を山人に贈らんとて、譚開先、山人に持来せるを買とれり。

- (5) 南瓜 (IV三五四)

華僑招待所展。佳作なり。

- (6) 揚鶴 (IV一五一)

昭和九歳九月十五日、乃至十九日の第一屆中央美術會 (文展) に獲たり。器用にして品を失はず。

第九、謝公展

概ね上海に在りて、中央大学系と来往繁し。器用なる上に、筆勢強く、又た筆太にして古人の風を有するも、何処となく洋画風なり。殆ど花卉鳥類の題目を反覆す。

- (1) 夕陽蓮⁽⁶³⁾ (IV二二二)

昭和九歳十二月十二日、世界大飯店個展に獲たり。粗に似て、仲々勁く、雅味もあり清楚なるが特色なり。

- (2) 花鳥及び蘭石⁽⁶⁴⁾ (IV二二三)

同上展。明人の法を想はしむる佳作なり。

- (3) 墨蘭 (IV二二四)

同上展。墨画中至難とせらるる蘭花を墨色を以て清楚に仕上げたる佳作なり。

(4) 菊花の図(合作 IV 三九一)

同上展。但し汀鷺が不倒翁を描く。馬万里が風菱を画き、以て「歳朝逸趣」を作れり。公展、菊をものせり。

(5) 新柳梅花(IV 五二八)

昭和十一年十一月十五日、青年会展に獲たり。

第十、王震

号、一亭。又号、白龍山人。吳興人。仏教を深く修む。山水得石田遺意。人物・花鳥は青藤及び白陽山人の神韻あり。落筆瀟洒。海外人に重要視せらる。憾むらくは時々浴塵の臭味あり(「草堂集」九一頁参照)。洋画派とは無縁の如きも、徐悲鴻も劉海粟も王済遠も常に一亭をかこみ、一亭亦た之等を利用して售画の途を拓く点よりしても、同派に属せしめ置くを便とす。

(1) 羅漢大幅(IV 一二三)

(2) 字幅(IV 一二四)

何れも昭和七歳冬、山人、上海仏租界金神父路の宅に文人墨客数氏を招宴の際、両幅を席作せるものなるが、筆線雄渾にして又た雅味あり。

(3) 無量寿仏(着色 IV 四四五)

昭和十歳十二月廿三日、上海に得たり。周鏞に獲たり。

第十一、俞劍華

王一亭・謝公展と共に呉興辺の出身にして、作意聊さかくどきも達者なる老画家なり。常に奇山妙水をものす。

(1) 奇峰矗天(IV 一四四)

上海に於いて昭和七歳、個展に求む。色彩、詩意あり。画法、特色豊かなり。

(2) 華山仰天池(IV 一四五)

仰天池の妙味を遺憾なく表現し、翁綬祺作の手巻「仰天窩」(「手巻類」参照)中にも本作の縮図とも見ゆるものをものし居れり。奇山は最も得意なり。

第十二、樓辛壺

原名、卓立、今名、邨。字、肖嵩、号、新吾。亦号、辛壺。縉雲人。山水を善くし、書は顔・柳を学び、又た篆刻に妙なり。画風、多少「コンヴェンショナル」の憾を免れざるも、現代作家中最も古法を伝へつつ、又た新味を加ふ。謂はばクラシックを代表すると共に、洋画派と密接の聯繫を有し、為に上海画家中最も重きをなす。

I、書

(1) 仿黄山谷書条(IV 三六七)

達筆なり。昭和十歳十一月九日、環球大飯店の個展に獲たり。

(2) 老莊字条(「人之力」 IV 三六八)

(3) 対聯 倩太白金仙書(IV 三六九)

文曰、「松風一曲山間月、柳綫千条湖上田」。

II、山水

(4) 山水(仙巖瀉瀑 IV 三六五)

力作たり。

(5) 風雨琅玕図(IV 三七〇)

(6) 青緑山水「吳淞菜蓼」(IV 四〇四)

昭和十歳十一月廿三日、庁後街十号、周宅個展に獲たり。文人の風さへあり。辛壺の最大傑作なりと自信し居たり。

Ⅲ、花卉

(7) 菊花 (IV四〇七)

同上個展。力作たり。

(8) 墨梅 (IV三六六)

同上環球飯店展に獲たり。墨氣、佳なり。

第十三、諸聞韻

俞寄凡・俞劍華等と交游する上海の老画家たり。花卉を善くす。

(1) 仏像 (IV二四五)

昭和十歳三月卅日、湖社展。寿仏にして精品たり。

(2) 松下の鳥 (IV二四六)

逸品なるを自認し居たり。同上展。

(3) 墨猫 (IV二四四)

同上展。「耄耄富貴図」。作品の特色、最も豊かなり。

(4) 鉢景 (氷厨清供 IV二四七)

(5) 菊花 (設色盆菊 IV二四八)

第十四、何遂

日本士官学校を卒業せる元軍人なるも、現在は立法院等の委員長を拝し、文官たり。筆致極めて雄渾にして一家を為す。年六十歳か。石濤の風もあるも、粗筆なる悲鴻にも似たり。写実的にして詩趣を含む。構図並びに色彩、大胆なり (「草堂集」三十八頁参照)。

(1) 雲松 (黄山写松 IV四〇一)

昭和十歳十一月廿三日、善徳堂展。

(2) 山水 羅漢峰 (IV四〇二)

(3) 山水二景 連理松・絃歌溪 (IV四〇三)

(4) 山水二景 松林峰・天都峰天橋 (IV四〇四)

第十五、胡猷雅

上海美術学校即ち劉海粟の学校出身。江西省南昌出身。書画共に独歩の風あるも劉派即ち洋画派に染む。温潤味を有し淡彩は水絵の如く、又た最も妙を得たり。(3) 郷土の滕王閣の図の如きは最も洋画の如くにして、又た特色豊かなる佳作なり (「草堂集」七十五頁参照)。

(1) 山谷詩書 (IV二五三)

昭和十歳三月卅一日、第一回青年会個展。達筆といふよりは画家の老巧さを有す。

(2) 金焦の図 (IV二五四)

名作なり。同上展。

(3) 滕王閣 (IV二五二)

同上展。南昌、即ち画人の郷里の風物にして、得意の作なる上に最大傑作にして真に迫り且つ洋画の如く写実に富む。先程、呉公虎が嶺南の郷里を描けると同じく (九十七頁へ4参照) 名作といひ得べし。

「梅花草堂美術写真帖」

(4) 秋山霧靄 (IV三四六)

昭和十一歳十一月九日、安樂飯店個展に獲たり。特色を充分に発

揮せる力作たり。

(5) 風雨同舟 (山人題 IV 一五二)

昭和九歳九月十五日、乃至十九日の第一次中美会陳の名品たり。

(6) 良馬 (IV 二五〇)

昭和十歳三月卅一日より四月四日迄、青年会個展に大成功を博したる際の白眉たり。殆ど献雅最優秀の作たるべし。(3) (IV 二五二) 及び次項の(7) (IV 一五四、「過」)と共に三名作たるべし。

(7) 「過」 (山人題 IV 一五四)

鳥が過ぎるの図にして山人題に曰く、「夜来風雨多、曉過兩三鳥」。

金陵漢西門堂子街二七胡宅展に獲たる名品なり。

(8) 歲寒 (雉 IV 二五一)

昭和九歳三月卅一日、四月四日、青年会展の名品なり。

第十六、結言

単なる交友、又は生地関係から、洋画派たる本稿に入つたといふだけで作品の上の特色は余り関係せぬものもあるのは、便宜上の都合に過ぎぬ。

唯だ全体として多少のつながりのある人物、殊に上海・南京即ち京滬の間に巢喰つた画人のみであることは共通点である。

も少し、此部類に入れ度い人々、例へば葛孝彝・胡郷卿(老大家)等もあるのだが、是は中間派に便宜入れることにした。

後記 (昭和廿一年一月三日)

大変局後の此等の人々を思へば、変容の大きさを一層感ぜずには居られない。此派の人々は仏京とか英京とかに遊んだ人々が多い為、

自然、大変局後は特に踏足を伸ばしてゐるだらうからである。殊に徐悲鴻に至つてはその旗頭として定めし颯爽たる英姿を画壇に顕してゐるであらう。

須磨ノート 59 「羊城中間派」

羊城中間派

昭和廿歳九月三日

中間派

高兄弟・陳樹人等 (五九)

昭和廿一年一月三日再観記。

客年九月三日の「例言」の記述に尽されたる感慨は、四ヶ月後、更に一層の深さを加ふるものあり。この月半ば便船にて帰朝せんとす。而して行先は戦争犯罪人の監獄なり。勿論例言にある如く、国難に趨くの覚悟を要す。字面通り国難の為、囹圄に身を委ねんとす。四ヶ月前、静かに支那画壇概観の筆を進めたと同様の静寂、尚ほ堂々と堅持し行かんとすること、是れ亦た邦家の為ならんか。彼を想ひ之を思はば、本稿の懐しみ一段なるを覚ゆ。

中間派

目次

第一、まえことば

第二、高剣父

- (イ) 横顔と作品の風格
- (ロ) 草堂収蔵作品展望

I、山水

- (1) 仿黄子久山水 (IV六二)
- (2) 楓葉荻花秋瑟瑟 (IV二九〇)
- (3) 烟寺晚鐘 (IV二九一)
- (4) 岩壑松濤 (IV五二一)
- (5) 黎葛民川江疊嶂 (IV五二二)

II、花鳥

- (6) 黎葛民歲寒三友 (IV五二三)
- (7) 英雄独立の図 (IV八三)
- (8) 花鳥 (IV四七)
- (9) 花卉 (IV七五)
- (10) 花鳥 (IV七七)
- (11) 花鳥 (IV一四〇)

第三、高奇峰

- (1) 昇龍墨意
- (2) 好鳥春色
- (3) 鷹の図 (IV六三)

第四、陳樹人

- (1) 楷書「黄葉詠書」 (IV四六九)
- (2) 蘭亭 (IV四四)
- (3) 寒鴉古木墨意 (IV四五)
- (4) 楊柳西風 (IV四六)

第五、鉄禅大師

- (1) 書軸 (IV一七)
- (2) 書軸 (IV一六)
- (3) 对聯 (IV一八)
- (4) 山水 (IV一七)

第六、沈演公

- (1) 沈演公題容仲生花卉 (IV二二)
- (2) 書幅 (IV一五)
- (3) 書幅 (IV七三)
- (4) 梅花草堂横屏 (IV三九三)
- (5) 双寿松樹 (IV二九六)

第七、容仲生

- (1) 佳人の図 (IV八)
- (2) 無量寿仏 (IV一〇)
- (3) 猿公の図 (IV四八)
- (4) 墨菊 (IV九)
- (5) 花卉 (IV一一)
- (6) 花卉 (IV一二)
- (7) 白菜の図 (IV七九)
- (8) 花卉 (IV二九七)

第八、朱鎮寰

- (1) 高士望山 (IV五二)
- (2) 山水 (IV二四)
- (3) 觀泉 (IV二五)
- (4) 山水大幅 (IV二六)
- (5) 山水 (IV二七)

(6) 風帆 (IV二八)

(7) 雪景 (IV五三)

(8) 淡彩山水 (IV五四)

(9) 花鳥 (IV七六)

(10) 山水 (IV二九八)

第九、黎葛民

(1) 岩壑松濤 (IV五二一)

(2) 川江疊嶂 (IV五二二)

(3) 漁村煙雨 (IV五二六)

(4) 北極閣煙雨 (IV五二七)

(5) 歲寒三友 (IV五二三)

(6) 杏花双雀 (IV五二四)

(7) 水流花開 (IV五二五)

第十、黃少強

(1) 仔肩初試 (IV四三)

(2) 役々農家婦 (IV一八七)

(3) 解纜君已遙 (IV一九〇)

(4) 円霞絶頂 (IV一八八)

(5) 曲院清秋 (IV一八九)

第十一、趙少昂

(1) 越台の図 (IV一九五)

(2) 鼎湖補山亭 (IV一九三)

(3) 荔枝灣一角 (IV一九二)

(4) 居高声自遠 (IV一九二)

第十二、方人定

(1) 月步 (IV三八六)

(2) 園後 (IV三八七)

(3) 細雨騎驟入劍門 (IV三八八)

(4) 珠江海市 (IV三八九)

(5) 孤城一角連荒野 (IV二九〇)

第三、陳之仏

(1) 母愛 (IV三二九)

(2) 綠竹行雀 (IV四四二)

(3) 墨梅 (IV四一〇)

第十四、龍鉄崖

(1) 瓜瓞綿綿 (IV一四九)

(2) 棕栢 (IV一五〇)

第十五、梁鼎銘

(1) 老虎 (IV五一九)

(2) 鷹 (IV五二〇)

(3) 獅子 (IV五三四)

(4) 羅漢墨意 (IV四六一)

第十六、胡郊卿

(1) 五大夫淡彩図 (IV二三四)

(2) 夕陽雀噪 (IV二二〇)

第十七、葛孝彝

(I) 遍歷六景 (冊 II七二)

(II) 故鄉雜觀六景 (冊 II七二)

(1) 秋山白雲 (IV三七二)

(2) 夏山白雲 (IV三七三)

- (3) 溪山若雨 (IV三七四)
- (4) 秋晴 (IV三七五)
- (5) 湖山在望 (IV三七六)
- (6) 秋山蕭寺 (IV三七七)
- (7) 清溪書屋 (IV三七八)
- (8) 仿一峰老人山水 (IV三八〇)
- (9) 空谷伝声 (IV三八二)
- (10) 湖山佳趣 (IV三八三)
- (11) 松崖春寂々 (IV三八四)
- (12) 馬 (IV三七九)
- (13) 小鶏 (IV三八一)

第十八、結言

目次、終り。

例言

現代国画にして草堂收藏の点数多くを占む。之を四派に分類して、最後分類がこの中間派たり。為に他の部類に洩れたるもの総てを網羅したるの感なきにあらず。

この日、聖上陛下、先聖に大東亜戦終了を御奉告遊ばさるの日、同僚と共にあらゆる予定を中止して、昨二日と共に、謹んで国難の日を念ぜり。

斯の日、此の稿を了る。而して此の日、岡村將軍、何応欽に終戦を申入るといふ。想ひ遠く感慨尽きざるものあり。

昭和廿歳九月三日記。

中間派

第一、まえことば

中間派といつても、地域的には広東派といつてもいい位であり、今まで説述して来た北方正統派、京滬に根城を有する洋画派、超然派といった三派の何れから観ても中間に位するやうな一団である。

元来、政治・地理学的に観測しても広東といふ地方は、北京とも、南京とも、上海とも違ふのみならず、それ等の他地方を広東から見れば従属的な地方であるかのやうに瞰下ろしてゐる。社会的にも経済的にもさうである。之を人種的矜持心から見ると、山人の主張し来つた客家思想、又は大客家主義に依つて、洪秀全が起した太平天国運動の如く、中国の他地方を風靡して見せるといふやうな抱負と意気とを持つてゐる。一九三二年の上海事変当時の第十九路軍総帥、蔣光鼐・蔡廷鍇等や陳銘枢・陳済棠等の軍事的野心、又は抱負も茲から来る。それと同様に茲に叙べんとする広東を根城とする中間派も中国画壇を何時かは風靡してやろうといふ野心に燃えてゐる事が読める。

然し別冊「蘇仁山」に於いて陳べた様に、広東の人々は何といつても多少偏見であり、早く言へば田舎染みたる処がある。この事は山人が広東在勤中、嶺南大学長、鍾榮光夫妻と論じたことが幾度であつたか知れない。そして鍾校長も終には山人の説を認めたのであつた。又この事は唐紹儀とも論じて見た。広東省中山県より出た唐老人も之を半ば承認してゐた。孫文でもさうである。

斯うした意味から、中間派の人々は、余りバツトしない気味はあるが、孫文になり得る可能性がある事を忘れてはならない。

その中心は高劍父・高奇峰の兄弟であり、それに政治的な地位で

ある中央政治委員長といふ陳樹人がある。そして剣父は寧ろ洋画派に高弟が多い事が示すやうに洋画に相当傾いて後年の作にはその臭味が多いにかはらず、奇峰は日本にも数次遊び、為に日本画の影響をも認められる純東洋式な作者である。不幸にも、弟であるのに兄剣父に先立つて永逝した。又た陳樹人は京都美術工芸学校留学生故、日本画風がぬけない。

然し何といつても剣父が主となつてゐるし、又た弟子が多いのでこの中間派はどちらかといへば洋画派に近い。それ故「洋画派」の緒言に陳べた様に、その派に入るべきであつた南画家の重鎮、胡郊卿や、安徽省安慶出身の新人、葛孝彝や、陳之仏をも入れることにする。

中間派は、広東が革命の中心、又は発祥の地であるだけに、剣父を始めとして革命画家と観られてゐる人物が多い。梁鼎銘の如きは金陵革命記念堂（靈谷寺）の戦争壁画を描くといつた程に革命と縁因を持つてゐる。

第二、高剣父

（イ）横顔と作品の風格

広東人で革命画家の第一人者たり。先年物故せる奇峰の令兄たり。山水・花鳥絶佳、現代全支を通じての代表的画家たるは定評あり。

民国十七年頃迄の作風は純支那画風なるも、爾後、世界、殊に印度・南洋等を遍歴の結果、（3）（IV二九一）「烟寺晚鐘」又は「烟江疊嶂」の如きは全く洋画の風を有するに至れり。草堂蔵品は何れも最も得意時代のものなれば、剣父の作風を論ずるに最も好適の参考資料たり。昭和十歳頃、弟子達もある為か南京に居住し、中央大

学講師として特別指導をなし居たり（「草堂集」三十五頁参照）。洋画派の容大塊の如きは、影の形にそふ如く常に剣父に従ひ居れり。

（ロ）草堂収蔵作品展望

I、山水

（1）仿黄子久山水（IV六二）

昭和五歳十一月十一日、羊城多賀谷に獲たり。

（2）楓葉荻花秋瑟瑟⁽³⁰⁾（IV二九〇）

昭和十歳六月二日、華僑招待所個展に獲たり。仲々の名作たり。

（4）（IV五二一）「岩壑松濤」と相似たり。

（3）烟寺晚鐘⁽³¹⁾（IV二九一）（插图17）

同上展の白眉たり。旧題は「烟江疊嶂」と称して芸術陳列館陳列第九一〇三号たり。次項（4）（IV五二一）「岩壑松濤」と相似たるも、最も注意すべき点は、本作は剣父が印度旅行に拾へる風景なりと、自身、山人に語り、この山水より洋画風に変化し始めたる経緯を語れり。全く洋画風景の趣あり。色彩は東洋画としては濃きに過たる点ありとさへ想はる。

「梅花草堂美術写真帖」

插图17 烟寺晚鐘（烟江疊嶂） 高剣父



何れにせよ最も重要な作品たり。

(4) 岩壑松濤 (IV五二一)

昭和十歳十一月十日、華僑招待所に於ける黎葛民個展に獲たり。

本作中の鳥は葛民の作故、合作といふべし。(2) (IV二九〇) 及び

(3) (IV二九一) と同時代の作にして相似たる点多し。

「梅花草堂美術写真帖」

(5) 黎葛民川江疊嶂⁽⁸³⁾ (IV五二二)

同上黎個展に得たり。之に老師たる劍父題す。

II、花鳥

(6) 黎葛民歲寒三友 (IV五二三)

同上展。劍父題す。

(7) 英雄独立図 (IV八三)

名作にして広東時代の作なり。

(8) 花鳥 (IV四七)

昭和五歳十月三十日、羊城文德路に獲たり。

(9) 花卉 (IV七五)

広東に獲たり。

(10) 花鳥 (IV七七)

名作なり。広東文德路に獲たり。

(11) 花鳥 (IV一四〇)

雅味あり。

第三、高奇峰

劍父の弟にして、日本にも数次遊べる結果、日本画に余程私淑し

居たる為、構図・色彩共に影響を隠し難し。特に題字の配列法に至るまで日本風を学べり。

性、劍父に比し温順にして物軟かなるが、作品より推せば仲々頑張屋にして、終に夭折せるが、身体を酷使せる為と称せらる。山人、広東に在る頃、弟子達に取巻かれつつ山人宅に到り、山人の收藏品を共に評し合へること幾度なるかを知らず。生活不規則にして弟子中特に女性多かりしは兎角噂を生み居たり。

一日、弟子達に容祖椿老や朱鎮寰等をも入れて、山人宅にて芸術宴を設く。興至りて、奇峰、山人画帖に、

(1) 昇龍墨意⁽⁸⁴⁾ (挿図18)

(2) 好鳥春色⁽⁸⁵⁾ (設色) (挿図19)

の二葉を立所に席画し、山人の昇龍なる雅号に因み一生初めて龍を描けりといへり。雲彩の墨氣生動し、その間を縫ふ昇龍の姿、寔に物凄き程の様相を呈す。画成るに従ひて、奇峰自身、且つ驚き且つ喜びて、余程気に入りしと見え、加筆熄まず、終に画帖に捺印すとて持ち還り、数日にして送り返せるを見れば、昇龍の図は加筆添墨更に生氣を加へ、名作たること一瞥にして知らるるに至り、画家のみならず、汪精衛も本作を見て、奇峰の最大傑作ならんかと評せり。別冊「高其佩」中、その絶品昇龍の図を叙するの項参照。其佩及び平福穂庵の昇龍の図にも匹敵すべき逸品たり。

(3) 鷹の図⁽⁸⁶⁾ (IV六三)

昭和五歳十一月廿二日、羊城文德路清秘閣に獲たり。簡単なるも気品高き逸品たり。

「梅花草堂美術写真帖」



插图18 昇龍墨意 高奇峰



插图19 好鳥春色 高奇峰

第四、陳樹人

広東人にして、初め日本京都美術工芸学校に数年学びて、後、東京に遷り、立教大学に入りて文学を修め、その頃法政大学にて梅謙次郎博士に師事し居たる汪精衛と交遊して、当時より政治界に深き關係を有するに至れり。汪精衛が南京行政院長となるや中央党部僑務委員会委員長となり、華僑との聯絡に当り、要職をなせり。

性極めて温厚にして元來が芸術家肌なれば、その筆力亦た温雅にして時に氣力余りにも弱きを啣^かちしむる程なり。

「ロマン・ロラン」は樹人の画を賞して旋律妙なりといへりとして得意なり。奈何にも「リズムミカル」なる作風なり。書法亦た勝れた

り。
南京郊外、梅樹の多き明孝陵の附近に新居を構え、光明の良き画室を設け、閑あらば画筆に怡しみ居たる光景、今尚ほ山人の眼底に在り（「草堂集」六十四頁参照）。

（1）楷書「黄葉詠書」（IV四六九）

昭和十歲十一月四日、金陵善德堂展に獲たり。秀逸絶佳の書法たり。「書道」八十五頁参照。

（2）蘭亭の図（IV四四）

昭和五歲八月一日、山人、北京より赴羊城の直後、広東に国画大展覽行はれ、群匠の中最も注目せられたるは樹人にして、特にこの蘭亭は洋画水彩のスケッチにも似たる程の淡彩振りにて、その画作帖中にも複され居たるを、初め山人見て洋画の水彩ならんかと思へる程なり。輕妙にして而かも構図ガツチリし居り、全く傑作なり。この時初めて樹人と会場に逢ひ、山人何気なく「リズムミカル」なりと評せば、「ロマン・ロラン」の所言と同評なりとて相を崩して喜

び居たり。⁽⁸⁷⁾ 後に至り、南京にお互い移りて再会の節、樹人はこの蘭亭の図を他の更に大なる作品と引替れるか、又は買戻し度しといひ居たつた。尤もこの作は、小品にはあれど、恐らく樹人畢生の作ともいひ得べし。確か作者の遊歩中なるを写しをり、洋画にしていへば自画像も中に在るわけなり。

「梅花草堂美術写真真帖」

（3）寒鴉古木墨意（IV四五）

同上展。墨意豊かにして弱きに失するに非ずやと思はるる程、自然の雅致を溢るる程に盛られたる逸品なり。

（4）楊柳西風⁽⁸⁸⁾（挿図20）

本作がロマン・ロランに褒められたるものの一たるが如く、糸の如き枝の風に揺らるる運動をさへ感じ得る如く、又た音律を如実に維^つぐが如き味さへあり。而も色彩の調和仲々立派に仕上げられ居り、傑作の一といふべし。樹人、南京に在りし頃、一週間程本作を見度しとて持ち還りし事あり、常に、広東に於いて山人がさらえる三点は好く観えて仕方なしと啣^あち居たり、強^あち策略かお世辞のみにはあ

挿図20 楊柳西風 陳樹人



らざるべし。日本画、殊に京都派より来る軟かく奇麗なる感じを経^{なせ}とし、支那画の豪放振りを緯^{よこ}としたる調和良き作品多し。

第五、鉄禪大師

六榕寺の住職にして全支通じての高僧。書画を善くし、魁偉なるその風貌は人を圧する程なり。後に述べる沈演公及び容祖椿等と交遊あるのみならず、その高僧たる上に、富裕なる為、政治家等の要人も六榕寺に出入、毎に鉄禪師と会ふを常とし、自然、諸方面の消息、茲に集中し居たり。而かも六榕寺は、蘇東坡の書額が寺院の風格を高め居るのみならず、全支通じ寺格昂上し居る程なれば、その住職たる鉄禪師の風格亦た思ふべし。山人とは交遊重なり全く親しき間となり、昭和十五歳、山人、東京に在るの秋、特に訪問し、山人、陶々亭の精進料理に東京の画家・文人（井上正夫の如き親支俳優もあり）と飲食をなし、日支文化交流に資したることあり。その際も、書軸一本を山人に贈れり。

(1) 書軸（黄字 IV一七） 東京に師自ら持来。

(2) 書軸⁸⁸（IV一六） 広東にて贈らる。

(3) 対聯（IV一八） 文德路。

(4) 山水⁸⁹（IV一七） 広東にて贈らる。

刷筆画の如く、風致雅味満溢の軸にして、宛然宋元の作の如し。

東京来訪の砌は、放翁等、日本書画の大家と作品の交換をもち、為に日本側に一衝動を与ふるに至れる程の書画作意を有す。齢齒は八十を超ゆべし。

第六、沈演公

福建の産にして、山人親友の亜洲司長、沈觀鼎、立法院参議、沈衡等を筆頭として十四名かの子福者たる演公先生は、大書家にして、譚延闓亡き後は支那第一たりと称せらる。山人とは、広東時代、或は六榕寺に、或は山人宅に、或は汪精衛邸にて繁く会同し、且つ衡・觀鼎両君とは、山人、北京時代以来の親交ある関係より、家庭的に交遊するに至れり。特に後述の老画家、容仲生を通じても大なる聯繫生じたる経緯あり。

(1) 沈演公題容仲生花卉（IV一二）

六榕寺鉄禪師に招かれたる際、居合せたる為、席作せるものなり。

(2) 書幅（IV一五）

毎朝千字文を書き了へざる事なしといふ程、習練^{おこな}懈らざる演公の書は若くして元氣あり、見ても氣持よし。

(3) 書幅⁹¹（IV七三）

羊城文德路に獲たり。

(4) 梅花草堂横屏⁹²（IV三九三）

昭和九歳春、沈觀鼎が外交部亞洲司長時代、演公来寧を機に沈家一族十数名、山人の鼓樓邸（現在大使官邸）に招きたる際、犬養木堂書「梅花草堂」の書額を觀て、翌朝本作を作りて贈る。成る程、大家なるを一瞥にして知らしむる力あり。斯くの如き演公との関係なぞも手伝ひて、その夏起れる蔵本事件も、觀鼎が亞洲司長であればこそ、山人が蔵本書記生発見後、汪院長を往訪（有野通訳官帯同）、「雨過天霽」と一言して日支関係の破綻を修むるに多少役立ちたるが如く感ぜらる。

(5) 双寿松樹⁹³（IV二九六）

昭和十歳六月一日、演公来寧、之を山人に贈る。演公の書は多き

も、絵は少し。之を贈りに来訪の際は沈衡夫妻同道、沈衡夫人は故林琴南の高弟たりし女流画家たり。その作品も草堂に贈り来れり。斯うした文界の關係こそ底冷えを救ふ唯一の途なるを感ず。

第七、容仲生

広東人にして、人物としては山人が支那に於いて会へる、又た交遊せる者の中、最も円満なる人物か。中山大学教授にして、又た広東美術学校中国画部長たり。名は容祖椿、花卉特に巧みなるも、又た美人画を良くす。

(1) 佳人の図⁽⁹⁴⁾ (IV八)

一瓢卷華卿に贈らる。繊細なる線と高雅なる色彩は雅作を必作するの素質を有す。

(2) 無量寿仏 (IV一〇)

作者に贈らる。

(3) 猿公の図⁽⁹⁵⁾ (IV四八)

昭和五歳五月八日、文徳路一小肆にて之を発見し、当時六十一歳の作者、仲生に示せば全く一驚せり。卅一年前、河南在住の砌の作なりといへり。力量溢るる許りにて寧ろ当時の腕前以上なりしを確証する逸作たり。

(4) 墨菊 (IV九)

(5) 花卉 (IV一一)

(6) 花卉 (IV一二)

沈演公(1) 参照。演公題作於六榕寺。これを山人に贈る。

(7) 白菜の図⁽⁹⁶⁾ (IV七九)

仲生七十八翁の傑作たり。

(8) 花卉 (瓜秋の図 IV二九七)

昭和十歳六月一日、演公持来、贈らる。名品なり。仲生老程⁽⁹⁷⁾、消息を送り附し、又た機あらば一書一軸を山人に贈り来る(第八の⁽⁹⁸⁾10参照)。

第八、朱鎮寰

仲生老の高弟にして、昭和五歳⁽⁹⁷⁾、広東美術学校卒業式に招かれて画展を観るに大幅山水の並ならざるものあるに逢ひ、仲生先生に尋ねれば、鎮寰の作なりとて(4)、宛かも自作なるが如く吹聴し居たる矢先、山人の評ありしを多とし、それが動機となりて広東画家達との親交生まれたる。師たるもの高弟を愛すること子女の如きなるは麗はしきものなり。鎮寰、時に齡纔かに十八歳なりき。

今頃は卅三、四歳にして名家となり居らんか。

(1) 高士望山 (IV五二)

(2) 山水 (IV二四)

(3) 觀泉 (IV二五)

(4) 山水大幅⁽⁹⁸⁾ (畢業作 IV二六)

本文参照。

(5) 山水 (IV二七)

(6) 風帆⁽⁹⁹⁾ (IV二八)

広東美展中の白眉なりき。

(7) 雪景 (IV五三)

(8) 淡彩山水 (IV五四)

(9) 花鳥 (IV七六)

(10) 山水⁽¹⁰⁰⁾ (IV二九八)

昭和十歳六月一日、濱公来寧持来（第七仲生へ8）七十九頁参照。

第九、黎葛民

高剣父の項に於いて陳べたる通り、その高弟にして、その作品の重要なものには剣父題すること多し（剣父の項へ4へ5）及びへ6）等然り）。全然剣父の筆法を摸するも、器用なる点、老師に勝るが如くなるは、将来葛民を偉とするも害するも一にこの器用さの点なるは注目を要す。

（1）岩壑松濤（剣父題 IV五二二）

昭和十歳十一月十日、華僑招待所個展に獲たり（剣父の項へ4）。

（2）川江疊嶂（剣父題 IV五二二）

同上展。（剣父の項へ5）参照

（3）漁村煙雨（IV五二六）

同上展。佳作なり。

（4）北極閣煙雨（IV五二七）

同上。容大塊作品に似たり。

（5）歲寒三友（剣父題 IV五二三）

高剣父の項（6）参照。同上展。

（6）杏花双雀（IV五二四）

（7）水流花開（IV五二五）

同上展中の傑作たり。

第十、黄少強

嶺南の大家、高奇峰の高弟にして、専ら現代支那プロレタリアの生活を写し、真に迫る作品多し。筆力雄健にして時々「カンバス」

上の油画かと疑はしむ。正に支那の「ソラナ」なり。全く在来の国画の風を逸脱し切れり。その最大傑作たる「仔肩初試」（1）IV四三）はソラナの草堂蔵品「アスファルト道路工夫達」の国画化せるものともいひ得べし。奇峰門下に出藍の誉あり。作法着想、実に奇抜にして、将来最も囑望に値ひす。趙少昂（第十一）と共に奇峰門下の双壁たるべきも、少強の力一杯なる作風とその全般にわたる熱とは到底現支那画家の何者も追ふべからず。奇峰を取り巻いて山人宅を訪れたる高弟多きも、少強は無口にして常に沈思し、年こそ異なれ又た国籍は支と西と異なれりと雖も、その風格と対作態度の慎重にして高莊なる、又た寡黙にしてガツチリしたる点迄、少強は今にして想へば故ソラナそのままなりしを想起して、偶然ながら快愉之に過たるものなし（「東西ソラナ論」参照）。

（1）仔肩初試（IV四三）（插图21）

昭和五歳六月廿五日、広東国画展にて全く驚かされたままに即買す。この山人の買振りに先づ驚けるはその老師たる奇峰なり。何人も一顧をさへ与へざる、若き労働者が就労の初日、滝の如く流る汗を拭ひもやらず、労働に疲れ切りし肩を押えて深き溜息をつけ

插图21 仔肩初試 黄少強



る一瞬の写生的構図の画幅に、山人、先づ買約の札をつけたる為、奇峰は山人の蒐集家としての老巧をこの一挙に見抜けりと直話せることあり。但し、今日少強を筆にして、その処女作を山人が広東に於ける処女買ひの対象とせるを、ソラナの例の「道路工夫」をも知らずに処女買ひせると対比し、興尽きず。

本作は「草堂美術写真旧帖」にあり。

(2) 役々農家婦 (IV一八七)

昭和十歳十一月四日、南京華僑招待所展に獲たり。前項作品が処女作なるに拘らず非常の出来にて、山人激賞したるに力を得て本作をものせり、と作者謂へり。力強き逸品なり。

(3) 解纜君已遥 (IV一九〇)

同上展中の最大作にて最も力瘤を入れたるもの。作者曰く、下絵は六枚に及べりと、苦心の痕見るべし。その傑作なる点、展覧中、南京最大紙、中国日報が吹聴せり。山人は画家に対し、処女作の方一層力ありといへば、感激せる面持にて山人に質問を続出せるが、(1)の作は自然なるに本作には作為のある点が異なるといへり。しかれども然而少強の作品のレベルが自然に(1)の程度に固まらば純粹の大家たるに至らず。

(4) 円霞絶頂^(註) (IV一八八)

同上展。山水風景なるも油絵の感あり。是れ少強の如きは、剣父・奇峰との密接なる関係なくば洋画派に入るべき画家たる所以なり。

(5) 曲院清秋 (IV一八九)

同上展。輕快の作にして、同様、洋画の趣あり。但し少強は人物を主題とする題材を以て最も適當となすべく、風景は次に陳ぶる趙少昂をとらざるべからず。孰れにせよ、少強習作の近況を知ること

興味多し。

第十一、趙少昂

高奇峰の高弟にして、前項黄少強と併せて現代粵派(広東派)の巨人たり。奇峰の影響にて画風概ね日本画風の秀潤あると共に、又た奇峰独特の豪放振りを存す。人物、少強に比して一層優型^{やうがた}にして素直なり。画風、亦た之を反映す。

(1) 越台の図 (IV一九五)

陳荊鴻合作なり。

昭和十歳十一月四日、南京展に於いて需む。越台の風物、眼の当りに観るが如し。

(2) 鼎湖補山亭 (IV一九三)

同上展。山人、昭和五歳、陳濟棠を西江梧州の戦陣に往訪(有久君・村松梢風・森清太郎・岳陽堂同道)の帰途、この補山亭を通りて、二日三夜を西江の山寺に過せり。豪雨に逢ひ山を下り得ず、精進料理三昧に窮したる記憶、本作を一見せば蘇る。名作なり。

「梅花草堂美術写真真帖」

(3) 荔枝湾一角 (IV一九一)

同上展。風物画としてのみならず創意に充ちたる色彩独特なるものあり。荔枝湾は蘇州の小河の如く、将た又ヴェニスのごンドラ遊びの如く、広東人が独木舟を浮べて春夏の節、名物にして、唐の玄宗皇帝が楊貴妃を誘ひたりとの故事さへある美味、又「蘇仁山」に詳述せる如く、怪才、仁山は荔枝を贈る者に対してのみ画を描き与へたりといはるる荔枝の美果が小川の兩岸を埋む。広東郊外の気分全く本作に躍如たるものあり。本作こそ少昂生粋の力作なり。

(4) 居高声自遠 (IV一九二)

同上展。広東の風物を写生風に出したるものなるも、創意多くして特色の豊かなる作たり。

第十二、方人定

広東人にして、高剣父の高弟たり。始め日本東京美術学校に学び、後、剣父と共に南洋を放浪し、画趣と画材実に豊富なり。色彩、最も妙なり。人物は真に迫るの慨あり〔草堂集〕三十四頁参照。

(1) 月歩 (IV三八六)

昭和十歳十一月十八日、金陵青年会人定個展。人物画中の白眉たり。色彩、邦画に似たり。人定帰粵後ものせる唯一の美人画なり。

(2) 園後 (IV三八七)

同上展。広東に於ける方家の後園に七面鳥遊歩するを写生せるものなり。色彩随一の作なり。

「梅花草堂美術写真帖」

構図は実に巧佳なり。

(3) 細雨騎驟入劍門 (IV三八八)

同上展。四川の実写なり。民国廿年の作、最も力を有する佳作なり。

(4) 珠江海市 (IV三八九)

同上展。民国廿年の作なり。写生に旬日を要せりと云へり。

伯林国画展に出陳、好評を博せり。

(5) 孤城一角連荒野 (IV二九〇) (挿図22)

同上展。粵都南門改修前の実景たり。色彩古佳にして雅作たり。

又た風物画として考古的参考品ともなるべし。

挿図22 孤城一角連荒野 方人定



第十三、陳之仏

日本美術学校出身。中央大学図案科部長、号雪翁、秀麗にして潤色あり。人格亦た潔なれば同志間に人望あり。昭和十歳以後、中国美術会の理事たり。(1)の「母愛」の如きは図案より相当離れて色彩を主とせる面白き試みなり。徐悲鴻と事を共にし居れば、洋画派にも入れ得る画家なり。

(1) 母愛 (IV三二九)

昭和十歳十月十五日の第三屆中央美術会(文展)出品の佳作たり。日本画にも似たる点あるも、構図は母鳥子鳥を巧みに組み合わせ、大胆なること国画の特質を失はず、佳作たり。

(2) 緑竹行雀 (IV四四二)

昭和十歳十二月十一日、勵志社展出陳の名品たり。

(3) 墨梅 (IV四一〇)

昭和十歳十一月廿四日、中美展に獲たり。広東派にも近き筆太の味を有す。図案作画等、総じて陳之仏は中間派なる部類に適はしき

存在たり。

第十四、龍鉄崖

洋画派に加へ置きたる謝公展同様の中間的存在にして、画風亦た中間的なり。老画家にして別段の特色はなきも極めて達者なる筆致を有す。

(1) 瓜瓞綿綿^(註) (IV一四九)

昭和九歳九月十五日、乃至十九日の第一次中美会(文展)出陳の名作たり。色彩・画意共に佳なり。

(2) 棕栢^(註) (IV一五〇)

筆勢実に淀みなく、而かも雅味を喪はず。

第十五、梁鼎銘

第一まえことばの末尾(三十二頁参照)に陳べたやうに、中間派の中心、広東は国民革命発祥の地であつて見れば、その画風もさうなるのは自然で、梁鼎銘は正にその代表的なもので、主席、林森との縁故から南京に出馬し、その恩師、高剣父の後援に依り、南京郊外靈谷寺の戦画室に、抗日や革命の意味のある壁画を描くのであつた。動物に巧みである。草堂収蔵のものは傑作に属するものである。

(1) 老虎^(註) (IV五一九) (挿図23)

昭和十歳十一月十日、青年会展(京滬展)に獲たり。本作は同じく「写於戦画室」としてあり、何かのきっかけに革命気分を出してゐる。(4)「羅漢墨意」と共に主席、林森より所望されたるものなりといへり。



挿図23 老虎 梁鼎銘

古きに失する所もあるも、自由にして力に富み、張大千の兄、張善孖(沢)等の虎を凌ぐこと遠きものあり(「草堂集」七十三頁参照)。

(1) 五大夫淡彩図^(註) (IV二三四)

昭和十歳三月廿五日、老翁持来、之に獲たり。II 60の冊「石象」

(2) 鷹 (IV五二〇)

同上展。同じく林森に所望せられたりといふ。

(3) 獅子^(註) (IV五三四)

吳志青、贈る。

「梅花草堂美術写真帖」

(4) 羅漢墨意^(註) (IV四六一)

昭和拾歳四月七日、作者展。

第十六、胡郊卿

以字行、号龍江居士。江寧人、又号醉墨軒主。人物山水花鳥を工みにするも、獸類、殊に老虎を善くす。『醉墨軒画譜』を著はし、広く世に行はる。筆力多少

十二題（冊の部へ39）と共に傑作に属す。草堂收藏徐天池の五大夫とも匹敵すべきものなり（「清朝名品録」第十一、百十三頁参照）。多少、重過ぎるの憾あるも筆勢大なり。且つ雅致豊かにして成程金陵の大家なるを想はしむる佳作たり。

（2）夕陽雀噪[㊦]（IV二一〇）

昭和十歳十二月十二日、豹文斎に獲たり。色多少濃きに過ぎるも名品たるを失はず。

第十七、葛孝彝

安徽省安慶の人。昭和十歳、未だ三十歳を出でて幾何もならざるも、筆致も構想も当代に類あるを見ず。安慶の家郷の收藏品、概ね神品なりし為か、想は深くして而かも用筆奇古、実に当代に見得ざる有望なる画家たり。昭和十歳十一月十五日、金陵第三流の展覧所たる民衆教育館に葛個展あり、偶々之を観て、山人驚愕し、目星しき作品を買へり（「草堂集」三十八頁参照）。

「冊葉」第四、現代冊中に本家の名冊。

（I）遍歴六景（現代冊へ22） II七二

徐悲鴻・陳樹人、跋附。

（II）故郷雜観六景[㊦]（現代冊へ23） II七二（挿図24・25）

は民国作品中の最珍奇なりとす。悲鴻も樹人も全く驚きたるは無理なからざる事実なり。即ち葛は洋画派にも中間派にも跨るの大家たるは観るべきなり。

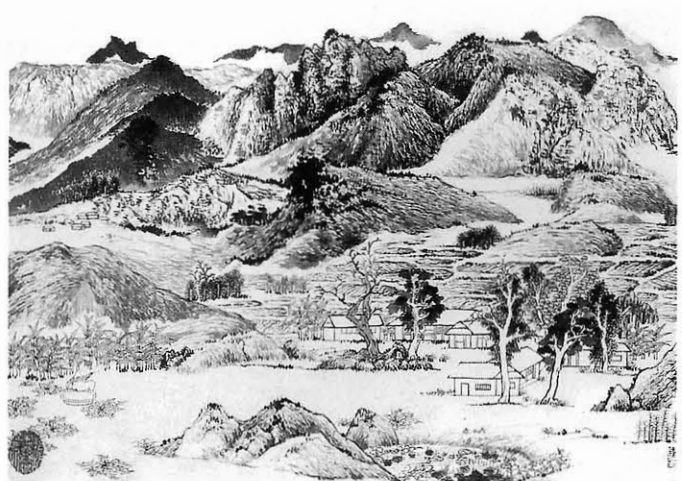
（1）秋山白雲（IV三七二）

昭和十歳十一月十五日、個展於金陵民衆教育館。宋元の風あり。

（2）夏山白雲[㊦]（IV三七三）



挿図25 同前



挿図24 故郷雜観六景のうち 葛孝彝

同上展。作者が最も得意の作なり。

(3) 溪山若雨 (IV三七四)

枯れたる味あり、悠遠感あり。

(4) 秋晴 (IV三七五)

風帆、特に佳作なり。

(5) 湖山在望 (IV三七六)

(6) 秋山蕭寺 (IV三七七)

絶佳なり。

(7) 清溪書屋 (IV三七八)

(8) 仿一峰老人山水 (IV三八〇)

(9) 空谷伝声 (IV三八二)

(10) 湖山佳趣 (IV三八三)

(11) 松崖春寂々 (IV三八四)

(12) 馬 (IV三七九)

(13) 小鶏 (IV三八一)

昭和十歳十一月十五日、同上展にて十三点に上記の冊二点、計十五点を買約して、要務の為、赴滬、帰寧して残部の中に更に買取り度きものあるべきを想ひつつ、松村・五百木両君等と同道、再訪せば、残部は全部売却済なり。安値なりし為もあるべきか、当時の展観として異例に属するの事象なり。(13)「小鶏」の軸を見て松村君感激し、是亦た割愛方を山人に執拗に申し出でたる為、約束はし置きたるに、展覧会終了後、山人が一旦そのコレクションに入れたるものを手離さしむるに忍びずと頑張りたる為、他の小品を贈り置けり。然るに昭和十五年、松村君は自働車事故にて急逝し、その遺品を山人華府より帰朝の際、携還せり。厳父に霊前にそなへん為、こ

の作を贈れり。収蔵品は友人の死後迄役立つことあるは幸なる哉。

第十八、結言

中間派も説き来れば、成る程十六名の画家は、北京派・京滬派・超然派等に比ぶれば中間派に属する筈なり。高兄弟は勿論なるが、少強・少昂等は大家の種なるは勿論なるも、葛孝彝は最近代の驚異にして民国全部のホープなるべきは否まるべからず。

「此等の人々の出身地たる広東地方は革命の地なり。大変局は此等の人々の活躍、此派の進出は特に見るべきものなるは予想に難からず。飽く迄、支那は混乱の一途を辿るべきや、或は統一せらるべきや。鍵は宛も此等の人々が中間派として支那現代画壇に雄飛し来たりしが如く、恐らく広東及び広東(西南)地方が握ることとなるべき歟。」

「」は後記。(昭和廿一年一月三日)

〈註〉

須磨ノート57「国画超然派」

1	須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 B甲946。
2	同前 A甲1165。
3	同前 A甲1164。
4	同前 A甲1162。
5	同前 A甲1163。
6	同前 A甲1160。
7	同前 A甲919。
8	同前 A甲918。
9	同前 A甲917。

37	36	35	34	33	32	31	30		29	28	27	26	25	24	23	22	21	20		19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	須磨ノート58「京滬洋画派」	同前	同前	同前	須磨未千秋氏寄贈	潘天寿の原名。	同前	同前	同前	同前	須磨未千秋氏寄贈	氏寄贈	款。俞劍華・黃賓虹・吳徵・鄭昶画。劉景晨・馬公愚書。須磨未千秋	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前
A甲1434。	A甲1074。	A甲1071。	A甲1073。	A甲1072。	A甲1069。	A甲1070。	A甲1068。		A甲1213。	A甲1212。	A甲920。	京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1103。		A甲921。	A甲926。	A甲976。	A甲1040。	京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲975。	京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1235。	仰天窩集錦卷のこと。蔣雄（叔南）上	A甲1058。	A甲1056。	A甲1059。	A甲1055。	A甲1057。	B甲929。	A甲1358。	A甲916。	A甲915。

64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41		40	39		38
同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	須磨未千秋氏寄贈	須磨未千秋氏寄贈	須磨未千秋氏寄贈	須磨未千秋氏寄贈	吉郎購蔵の这幅画」とある。	劉海粟「画牛瑣憶」〔劉海粟芸術隨筆〕上海文芸出版社（二〇〇二年）
A甲994。	A甲1037。	A甲1039。	A甲1156。	A甲1154。	A甲1155。	A甲1258。	A甲1259。	A甲1262。	A甲1263。	A甲1260。	A甲991。	A甲989。	A甲988。	A甲1381。	A甲990。	A甲1074。	A甲911。	A甲912。	A甲1040。	A甲924。	A甲925。	A甲1363。	京都国立博物館蔵。館蔵品番号	A甲1362。	A甲1285。	京都国立博物館蔵。館蔵品番号	A甲1286。	に「一九三二年、『海粟近作』重版、封面改用一九三一年在普陀所作的一幅油画《水牛》、……五十多年来、我一直想念着被日本人須磨弥

- 65 同前 A甲1038。
66 同前 A甲901。
67 謝公展（名は翥）は江蘇鎮江の人。兪劍華（名は現）は山東済南の人。
68 「仰天窩集錦卷」（A甲1235）中の兪劍華筆仰天窩図（1931年6月20日作）中に雁蕩山仰天池を描く。翁綬祺作とするのは何かと混同した誤り。注19参照。
69 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 B甲992。
70 同前 A甲1303。
71 同前 A甲1304。
72 同前 A甲1305。
73 同前 A甲1075。
74 同前 A甲1076。
75 同前 A甲934。
76 同前 B甲917。
77 同前 A甲986。
78 同前 A甲985。
79 同前 A甲984。
80 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲970。
81 同前 A甲971。
82 この絵は民国14年（1925）、広東の彼の仕事場である懷樓で制作されている。軸裏にある須磨弥吉郎の墨書によれば、一度「万国芸術院展観」に「烟江疊嶂」の作品名で出品されたものという。民国24年（1935）6月1日、南京華僑招待所で開幕した高剣父絵画展に「烟寺晚鐘」の名で出品され、当日、陳樹人夫妻や、その他の国府要人と連れ立って参観した須磨が購入したが、その状況は、須磨が「画展記」と名付けたスクラップブックに残す新聞記事に詳しく報じられている。ところで高剣父がインドに旅行したのは、この絵が作られた五年後の1930年から31年にかけてのことであるから、須磨の話は矛盾するが、高剣父が旧作に印度旅行の成果として大きな卵型の仏塔が覗く山上の寺院を補い、作品名を改めて出品したとも解釈できる。

- 83 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1301。
84 須磨帖（須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1257）のうち。
85 同前。
86 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲966。
87 フランスの著名な作家、ロマン・ロランが陳樹人の絵を見て、そのような批評をしたのは、徐悲鴻が主弁し、1933年5月10日、フランスのパリで開催された中国近代絵画展でのことと考えられ、黎葛民・麦漢永「嶺南革新派画家陳樹人和高剣父」によれば、ロマン・ロランは出品された陳の「高柳晚蟬説西風消息」を見て「有音楽的節奏」と述べたという（当時法国著名作家羅曼・羅蘭对他所作的《高柳晚蟬説西風消息》一画、謂有音楽的節奏」《文化史料》1983年6巻）。従って、両者が1930年8月に広州ではじめて出会う会話を交わしたにせよ、陳樹人がロマン・ロランの評語を云々したのは、早くとも1933年以降のはずで、時間的ずれがある。
88 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1183。
89 同前 B甲959。
90 同前 A甲1195。
91 同前 B甲931。
92 同前 B甲932。
93 同前 A甲1082。
94 同前 A甲1255。
95 同前 A甲1254。
96 同前 A甲1256。
97 昭和六年（1931）の誤りか。朱鎮寰の卒業記念作である（4）山水大幅には「昇龍山人清賞 辛未（1931）三月 朱鎮寰画贈」という容祖椿の代署がある。
98 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1050。
99 同前 A甲1052。
100 同前 A甲1051。
101 昭和十一年（1936）の誤りか。
102 須磨末千秋氏寄贈 京都国立博物館蔵。館蔵品番号 A甲1301。

